

4785

216  
331

戀心姫と文姫



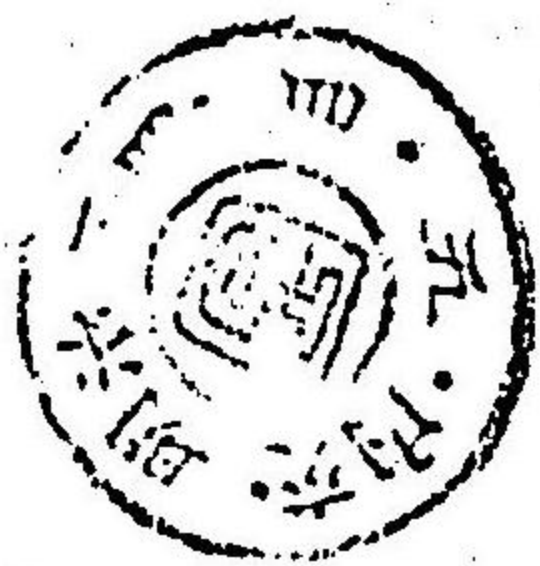


特22

236



上海圖書館藏









序

聖人の教に、若き時は色を戒しめよ、中年に及びては慾を戒しめよとのたまへり、人世の事すべて皆迷あらぬはなけれど、少年の時最も免れ難き迷は色也。中年の時はやゝ分別つきて、妄りに色に迷ふもの少なければども、おほ利慾に迷ふもの、比々皆然り。其他、功名や、榮譽や、美酒嘉肴や、輕裘肥馬や、みなこれ凡人の迷ふ所のものにして、また凡人をして能く浮世に活動せしむる所以のもの也。

戀愛は神聖なりとは、何者のたはけものゝ寐言ぞや。浮





世の戀愛、必ずしも肉慾的あらざるものあるも、なほ利己的也。之を專領するに至らざれば止まず。利害得喪を忘れて無邪氣なる事はあれど、いづくにか神聖の点を求むべき。而して戀愛といふ語は、空想に耽る少年の耳には、一種の福音也。詩人之を咏じて愛讀せられ、著書之を題目にして歡迎せらる。之が爲めに身を誤る少年數ふるに違あらず。君が一日の情の爲めに妾が百年の身を誤れる少女も多かるべし。人を活動せしむること共に、また墮落せしむ。戀愛は竟に一種浮世の魔物也。戀愛が浮世か、浮世が戀か、人は竟に戀愛の動物たるを免

れず、而して戀の中にも正しきあり、不道德あるあり、上品なるあり、賤しきあり。其不道德なるを去りて、正しきに就かしめ、賤しきをすて、上品あるに赴かしむるは、人類を化するの一方便たらず。とせんや。毒にて毒を消さしめよ、以て戀愛を醇化するは、自然の良法たらずんばあらず。著者の用意、茲にある乎、一言を題す。

明治三十四年三月

桂濱月下漁郎



われ等をして、麗はしき戀の美を讃へしめよ。  
 われ等をして、戀愛と文學との關係を研めしめよ。  
 よ。あゝ、世の審美眼ある人々よ。願はくば、われ等  
 を見るに、戀を慥憑するものを以てする勿れ。



掲 載 目 次

戀	愛	一
戀愛と文學	.....	一六
戀と厭世詩人	.....	二九
初戀と少女	.....	四三
女性と戀愛	.....	五三
歌と戀と	.....	六八
情死と戯曲	.....	九二
戀愛の犠牲	.....	一〇六

表 紙

山中古洞書

口 繪

一條成美書





戀愛と文學

柳村

變

雌雄たがひに相逐ふを見て戀のこゝろの如何にやさじきかを想ひ  
 つべし。吁、青春の情もゆらんやうある若人のもの狂はしくあるまでも  
 戀に焦がれて胸に立ち騒ぐ煩惱の雲を拂ひがたきものまさに故あ  
 りとこそ言ふべけれかの古への歌人も謠ひけんごとく忍ぶれども色  
 に出でくる戀こそげに曲ものあらずや。思ふにたがひに温き情をかは





して千代の契を結ぶものはいざしらず。人目の關にへだてられ逢ふことさへ儘ならぬうき世の戀に苦しめる人は如何に世を憂しとや念ふらん。綿帳繡帷のうちには手を携へて、かたみに痴情を交ゆる男女は、われこれを言ふに惚びず、聖き心を慕ひつ慕はれて、花の晨月の夕物思ふ二人の身の上をこそ、いとわはれに思はゆるなれ。わゝ戀は美はしく悦ばしきものゝ限りなるかな。

花よ、鳥よ、風よ、月よ、上帝は美はしき自然の景色をわれ等の前に横たへ給ひて、われ等の目を怡ばしめ、われ等の耳を娛ましむされど、われ等はそれよりもよく美はしき上帝の恩賜が人の前に配列せられつゝ、あると見る。そは即ち戀あり、戀は弦なけれども、われ等に觸れて、いとも美妙ある音色を發ち、聞くものをして恍惚として、我、我あるを忘れしむ。

われ等はかく戀愛をもて、人の思想の中、いとも美はしきものなりとあ

す。われ等は信ず、人の戀に擒はれて、その花園のやうある半屋の中に入れらるゝときは、名譽も、財寶も、金章も、紫綬も、その他あらゆるものゝ一切を抛つに吝かあらざることを。——それ、人の此の世に於いて、煩悶し、苦惱するは、功名を得んが爲めなり、財寶を獲んが爲めなり、その他に於いては、何の目的もなき、何の希望もなき。而も、この苦心經營して欲求する功利をすら、戀の爲めには一擲するを躊躇せざるにわらずや。フランスの詩人ユーゴー (1802-1885) は謳うて曰はく、

われもし王と 身をあさば  
君が笑顔の 酬ひには  
力の限り さづくべし  
黄金かやく 王冕も  
四海に靡く 民草も



海を蔽へる 兵艦も  
 われ若し神ど 身をなさば  
 君の情に 報はましく  
 有らゆるものを 贈るべし  
 み空も陸も 渡津みも  
 われにまつらう あまつ女も  
 天界の 無窮をも

如何に戀の力の強きことよ、この世に属する一切のものは、ことごとく之をその前に獻げて、身をも靈をも顧みざるあり。あゝ世に莫耶の乃ありとても、なごか、この強き情の絲を兩斷し得べけむ、たゞこれを兩斷し得るものは、慕ひ慕へる一方の變心あるのみ、されど、それすら、あは、戀をして消滅せしむること、能はざる場合あるあり、あゝ、斗り知り難きは戀

なる哉

戀愛は、人世の秘鑰あり、戀ありて後、人生あり、愛ありて後、社會あり、世の中より戀愛を抜き去りたらむには、人間何の所にか、色味あらむ、然るに世には、一種の冷やかある哲學者ありて、これを卑しく醜きものありとし、全力を擧げて、排斥せんとせり、されども、これらは、みち戀愛の半面を暗て、他面に籠れる、純潔なる心情を觀ざるもの、われ等は、極力之を批難して、戀愛の爲めに、辯護の勞を採らんとするものあり。  
 思ふに戀愛は、愛 Love 若しくは同情 Sympathy と稱すべき、獻身的の感情にして、その間、一の要求するところなきものあり、されば、夫の肉慾的意志を含めるもの、ごときは之を眞の戀とは言ひ難かるべく、野合や、淫奔や、みな、その中に計へらるゝの資格あし、眞正の戀愛は、靈性の感激にして、中に野心を包容するを許さず、神聖にして無垢あるものなり、大



聖ポロは嘗て書をコリント人の許に贈りて『愛』の何物あるかを説いて曰はく、  
 假令われもろくの人の言および天の使の言を語ることも若し愛なくば、鳴る銅や響く鉄のことし、假令われ預言するの力あり、又すべて  
 の奥義と諸べての學術に達し、又山を移すほどある、諸べての信仰ありと雖も、若し愛なくば、數ふるに足らぬ者あり、假令われ、我が凡て  
 の所有を施こし、又焚るゝ爲めに、我が身を興ふることも、若し愛なくば、  
 我に益あし、愛は寛忍をかし、又人の益を圖るあり、愛は妬まず、誇らず、  
 驕傲らず、非禮を行はず、己の利を求めず、軽々しく怒らず、人の悪きを  
 思はず、不義を喜はず、眞理を喜び、凡そ事包み、おほよそ事信じ、凡そ事  
 望み、凡そ事忍ぶあり、愛は永久も墮る事あし、然れど預言は廢り、方言  
 は息み、知識もまた廢らむ、我儕の知識全からず、預言も全からず、全き

もの來るときは、全からざるもの廢るべし。われ童子の時は、語るところ  
 童子の如く、識るところ童子の如く、慮るところ童子の如くありし  
 が人と成りて童子の事を棄てたり、われら、今鏡をもて見る如く、見る  
 ところ昏然あり、然れど彼の時には顔を對せて相見ん、我れいま知る  
 こと全からず、然れど彼のときに、我が知らるゝ如く、我れ知らん。そ  
 れ信仰と望と愛と、此の三の者は常に在るあり、此のうち尤も大なる  
 ものは愛あり、  
 と戀や愛は、かくの如く、人をして寛容あらしめ、又勤勉あらしむ、婚姻は  
 人をして、社界に入らしむる第一歩あると共に、戀は人をして、社界に近  
 邇せしむる第一階あり、これあるが爲めに、人は枯死せずして、娑婆と稱  
 するものと闘ひ、浪風あらしき浮き世の中に立ちて、天の使命を全うする  
 ことを得るなり、もし、これ戀愛なる魔力の存在することなくば、世は恐



らくば枯死せんよし枯死せざるまでも衰へくしてかの黄落せし秋の末つ方の樹々の如く見る影もあきに至るべしさればこそ、ディアナの神は此の世に怪しき戀の俤を作りて悲哀に傾ける萬人の心を樂しき愛の花園に牽き給ひたるを。然るに悲しきか、智惠のふかゝらざる凡夫は、これを以て一種の快樂とあし、殆んど獸にも似たる行をあし、恬として恥ぢざるものあるに到るされども戀は、さる果敢なきものにあらずして、神聖純潔あるものなり、かの劣情に一身を溺らして、遂には天賦の健康を害するが如きもの、夢にだも見ることも能はざるものなり、戀はなほ鐵路を輾る車輪の如きか、而して野合や淫乱や、それ等は軌道をかき横徑を輾轉する破れ車の如き乎、前にも言へるごとく戀は男性と女性とが互に抱く相思の情あるに、もし何れかの一方にしてそれを飲さざばこの車輪の一つ飲くれば、廻らざるごとく、戀は忽然として消滅

せん。若しまた一たびこの良心を殺滅して、猥りに淫欲の奴とならんには、かの軌道をかき荒徑を轉ぶ車のごとく、石にふれ、岩に衝きて進むこと能はざるのみか、遂には車輪を損じて、廢物とあらざるを得ざる可し、あゝ、世の滔々たる人よ、希くば、この間の意を了得して、幸に神のみ心に反くことなかれ。

前にも述べけん如く、戀愛ある者は、ふかゝ人の胸中に浸染して、その思想を支配する者あれば、世を捨てたる厭世家さへも、人を殺したる猛者さへも、これが爲めには、懊惱憂悶して、浮名を千載の後に貽すとあしとせず、かの剛腹あるバイロンすら、この至妙ある無聲の聲を聞きては、潛然として衣の袖を絞りしに、あらずや、かの勇武あるアレキサンドルすら、この美はしき無色の色を見ては、撫然として沈思の姿ありしに、非ずや、あゝ、全法界の財貨よりも、大雪山の嶺よりも、大恒河の水よりも、貴く、



高、深、き、も、の、は、此、の、無、聲、無、色、の、戀、愛、に、あ、ら、ず、し、て、何、ぞ、や、三、千、歳、の、昔、  
に、於、い、て、お、り、難、き、佛、法、の、教、を、創、め、給、ひ、い、た、く、女、人、を、嘗、り、た、る、釋、迦、無、  
尼、佛、す、ら、も、シ、ッ、タ、ー、タ、ー、た、る、の、位、を、捨、て、伽、毘、羅、の、城、を、出、で、ん、ど、す、  
る、時、に、は、千、代、を、契、り、し、耶、輸、陀、羅、姫、に、未、練、の、心、を、貽、さ、さ、る、を、得、ざ、り、き、  
か、く、と、の、み、云、は、ん、に、は、わ、れ、等、は、戀、愛、を、推、奨、す、る、も、の、と、し、て、老、境、に、身、  
を、お、け、る、人、の、笑、を、買、は、ん、さ、れ、ど、も、吾、れ、等、は、た、ゞ、世、の、常、の、「戀」を、惱、め、ど、  
い、ふ、も、の、に、お、ら、ず、わ、れ、等、は、正、し、き、道、あ、る、戀、に、醉、へ、と、い、ふ、も、の、な、り、か、  
の、涙、き、冷、眼、の、も、の、は、語、る、に、足、ら、ず、心、あ、る、青、春、の、士、は、試、み、に、ド、ラ、イ、  
デ、ン、の、歌、を、讀、め、

Pain of love be sweeter fir

Than all other pleasures are

戀、愛、に、伴、ふ、苦、痛、を、以、て、も、ち、ゞ、の、快、樂、の、上、に、お、か、ん、ど、は、如、何、に、や、さ

し、き、言、葉、に、あ、ら、ず、や、か、ゝ、る、心、を、持、て、る、も、の、に、あ、ら、ず、ん、は、逆、も、真、の、戀、  
を、味、は、ふ、こ、と、能、は、さ、る、べ、し、又、心、あ、る、も、の、は、雅、歌、を、緋、け、い、か、に、戀、の、美、  
し、き、か、な、

ね、が、は、し、き、は、彼、の、そ、の、口、の、接、吻、を、も、て、わ、れ、に、く、ち、つ、け、せ、ん、と、あ、り、  
汝、の、愛、は、酒、よ、り、も、ま、さ、り、ぬ、な、ん、ぢ、の、香、膏、は、そ、の、香、味、た、へ、に、馨、ば、し、  
く、あ、ん、ぢ、が、名、は、そ、ゝ、が、れ、た、る、香、膏、の、と、し、是、を、も、て、女、子、等、あ、ん、ぢ、  
を、愛、す、わ、れ、を、引、き、給、へ、わ、れ、等、汝、に、し、た、が、ひ、て、走、ら、ん、王、わ、れ、を、從、へ、  
て、後、宮、に、い、れ、た、ま、へ、り、我、ら、は、汝、に、よ、り、て、歡、び、樂、み、酒、よ、り、も、ま、さ、り、  
て、汝、の、愛、を、ほ、め、た、ゞ、彼、ら、は、直、き、心、を、も、て、汝、を、愛、す、エ、ル、サ、レ、ム、の、  
女、子、等、よ、わ、れ、は、黒、け、れ、ど、も、な、ほ、美、は、し、ケ、ダ、ル、の、天、幕、の、と、ど、く、ま、た、  
ソ、ロ、モ、ン、の、帷、帳、に、似、た、り、わ、れ、色、く、ろ、き、が、故、に、日、の、わ、れ、を、焼、き、た、る、  
が、故、に、我、を、視、る、者、か、れ、わ、が、母、の、子、ら、わ、れ、を、怒、り、て、我、に、葡、萄、園、を、も



らしめたり、我れはおのが葡萄園をまもらざりき。わが心を愛するものよ、あんぢは何處にて、あんぢの群を牧あひ、午時、いづこにて之を息まするや、請ふわれに告げよ、あんぢを覆へるもの、如くして、あんぢが伴侶の群のかたはらに居るべけんや、婦人のいとも美はしきものよ、なんぢもし知らずば、群の足音にしたがひて出ゆき、牧羊者の天幕の傍にて、汝の黒山羊を牧へ、わが佳耦よ、我なんぢを、パロの車の馬に譬ふ、あんぢの臉には、鏈索を垂れ、あんぢの頭には、珠を陳ねて、至も美はし、われら、白銀の星をつけたる、黄金の鏈索を、あんぢのために造らむ。王その席につき給ふとき、わがナルダ其の香味をいだせり。わが愛するものは、われにとりては、わが胸の間におきたる、没薬の袋のごとし、わが愛するものは、われにとりては、エンゲデの園にあるコペルの英華のごとし。あゝ、美はしきかな、わが佳耦よ、あゝ、美はしきかな、あ

んぢの目は、鴿のごとし、わが愛するものよ、あゝ、あんぢは、美はしく、また、た、樂しきかな、われらの床は、青緑あり、われらの家の棟梁は、香柏、その垂木は、松の木あり。

ヘブリユー思想の森嚴ある中にも、おは、この温粹ある美情を包みたりき、まして、涙の多きもの、誰かは、情の烙を胸の中に燃やして、温かき血を湧きかへさざるものあらんや。ヘンリー、ワツズウオース、ロングフエロ  
— (1807—1882) は歌うていはく。

Wearry hearts ! slumbering eyes !

drooping souls" whose destinies

Are fraught with fear and pain,

Ye shall be love'd again !

No one is so utterly desolate,



But some hearts though unknown  
Responds unto his own,

(Longfellow)

嗚呼、愛に沈むものよ、嗚呼、患難と恐怖との下に、疲れし頭を低るゝものよ、汝もまた愛せらるゝあり、如何に運命は拙きも、如何に此の世は淋しきも、知らぬ情の友ありて、此の身の愛に應ふるあらん、とは、如何に、やさしく、情ある言葉あらずや、嗚呼、愛と云ひ、同情と云ひ、戀と云ひ、忠と云ひ、孝と云ふも、ひとしく、是れラヅにはあらざる乎、かの區分して、忠孝貞信といふもの、畢竟その境遇の變化のみ、熱き心にかはりはあらぬなり、戀は、これを母子の間に擬すれば、慈愛とあり、孝行となるべく、これを君臣の間に嵌むれば、仁慈となり、忠良とあるべし、即ち根本は同一にして、何等の變化あらざるも、その表顯する差異によりて、假りに範圍をさだめ

たるのみ、されど、われ等は、これ等、くさくさの情愛の中にて、いともよく人を美にするものは、戀あることを信ずると共に、よく人を魅するものも、また、この戀あることを、信せざるを悲しむものあり、あゝ、世の戀に焦れて悶々たる青春の士よ、御身の愛は、肉を離れたるもの、かれ、御身の戀は、純潔あるもの、たれ、希くは、忌はしき劣情の爲めに、魅せられず、靈の主に表はるゝ、愛情を盡くして、女は男を、男は女を、此の世に、属せる一切のもの、のよりも、よく愛し、よく親しまんことを。



## 失戀と文學

十六

學 文 と 愛 戀

世の所謂戀愛小説あるものを見るに圓滿なる戀を描きたるもの妙きを覺ゆ、それは深刻ある悲劇小説を要求する聲高かりし爲め、作者の多くは、多少評家の言葉を容れて、喜劇にちかき内容を選ばざりし結果、圓滿ある戀愛を排斥して、悲劇ともいふべき——哀れなる失戀を寫したるものあるべし。われ等は、小説取材の美の範圍の裡に在る以上は、これを如何ある方面より採り來るも敢て批難するものにあらず、また、ざる權利あるべしとも思はず、されどわれ等は、今の小説の餘りに悲的あるもの、多きを悲しまずんばあらざるあり。されば、惡しざまに云はん時は、作者は、同情を讀者より、より多く買ふの方便として、哀れなる失戀を詩材とあしたるやも測るべからざるあり。

學 文 と 戀 失

失戀を主題とせる詩は、ひとり小説のみにあらず、韻文においても、われ等は、多く之を見たりき。美文においても、然りき。あゝ、擾々たる作者よ、ちんち等は、失戀の外に、その材料をあさり得べからざるか、將たまたより多くの同情を惹かんとて、讀者を釣る爲めに、失戀を主題とするに勉めしか。おほその以外に、何等の理由の存するあるか、われ等は、この問題に對する解釋を、ちんち等の口より聞かんことを切りに冀ふものなり。されども讀者よ、われ等もまた、茲に、失戀に就きていはざるを得ざるか。願はくば清き心耳をすまして、今わが失戀に對して、涙を墮して言はん。とす。所を聴け。

樂天家の言はんごとく、わが社會は、ことごとく、樂しきものにあらず、靈心理想、なんごの上より見なば、いざ知らず、われ等の肉躰を迫害する社會は、面憎しといは、云ひ得可し。かの戀を遂げ得ずして、心を憂愁の深

十七



淵に沈め、身を苦悶の筈に轉がすもの、ごとき如何に、おはれあらずや。われ等は悲しき觀念をもて、いたくも彼等の身に同情を捧けて、一掬の泪を賦ふるを辞せざるものあり。

戀の成效するや、せざるや、を愛ふる間は、また幾何かの希望あり、されば夫のドライデンも云ひけん如く「戀に伴ふ苦痛を以て、もろく、の快樂の上位におく」勇氣もあり得可けれど、戀はその決果を表はして、不成功ありとの宣言を頭腦の中に享けんごとき、總てのわが財産を褫奪さるるよりも、あは多くの苦痛を感じるからん、否、われ等は、その當時における彼等の胸の中には、一命をも捨てんとする、大いある決心も起りかねまじきことを信ず。ことに、やさしく、心弱き女性において、その最も甚しきを見るあり、あゝ、垂乳根のみ親をも、高きく、官位も、美はしき紫綬金章も、海山あす財産も、かの女の爲めには捨つべし、かの男の爲めには獻ぐ

べし、ごかく決心せし者が、わが戀ひ慕ふ人より情なき言葉をき、しごとき、又心あらぬ素振を見せられしごとき、また、戀を拒絶せし文を讀みしごとき、また、人をもて、その戀を諦むべきやう傳へられしごとき、如何に失望落胆して、此の世にあらざるからば、かゝる愛さ目を見まじきにご、歎き悲しむかを見よ。惟ふに、この一刹那の、彼等の心は、乱れ騒ぎて、恐らくば、その常心を失ふあるべし。

失戀後の彼等は、必らず何等かの決心を、あすは、昔よりの歴史、もしくは、稗史、もしくは、戯曲、もしくは、小説、もしくは、韻文の、親しく、われ等の耳に、囁くごころなり。いで、われ等をして、この拙き筆を呵して、その決心の如何ある状態を現出するかを説かしめよ。

失戀は人をして、狂はしむ、あるべからざる事を、あし、考ふべからざることを、窺ひ、甚しきは、刑事上の罪人となり、その身を殺すに到るものあり、



あゝその汚はしき行爲はにくむべきも、その心根は優しくもまた哀れ  
からずや。

既に失戀の人となる、心の弱きものは、たゞ胸の中に鬱きて、悲しく思ひ、  
憂たく思ひ、何の爲すこともなく、うつら／＼とあだに日を送るものあ  
らん。されどもや、心強き人は、その最後を勇奮おらしめ、悲哀のうち、多  
少勇壯なる分子を加ふるにいたるべし。あるものは、出家得道して、浮世  
を外ある山林に遁れ、或るものは、自殺を圖りて、黄泉の客とある。かく、そ  
の行は、さまざまあるめれど、心は同じく、憂悶の一筋道を辿れるものい  
み。さりながら世には、心あさく、氣の浮きたる人のありて、戀ひ慕ふ人が、  
わが戀を却けしをもて、その人を怨むものあり、戀ひ慕ふ人の、わが戀を  
受けざりしとて、遂にはその人を忘れ果て、顧みず、他に、男は女を、女は  
男を、更らに戀するものあり。これ等は、まことの失戀にはあらざるべし。

れど、前者のごときは、世に例多きことにして、われ等は、寧ろ、その心の闇  
路に踏み迷へるを憐まさんばあらず。

その日直ちに大助は放逐せられたが、明くる日の朝、新に備はれた花  
園守が、箒を持つて、枝折戸を開いて入つて見ると、這は如何に、あれ程  
の撫子が、悉く打折られ、皆蹂躪られて、狼籍の限り、無慘此の上も無し。  
驚きながら彼の石像の下へ行つて見ると、其處には大助が花鉢を持  
つて、咽喉を搔切り、打伏しての最期。飛んだ血は獅子の顔を染め、流れ  
た血は泉水の色を紅にして、慘又慘もの凄き此の死狀に、一點の美を  
留めたのは、折れぬ撫子の花一輪、死しては誰一人手向ける者の無い  
のを悟つてか、斃れたる前に立て、あつた。

これ『花守の戀』の結末にして、大助ある花守が失戀の結果、かゝる狂暴の  
振舞をなし、遂に自らもまた、鉢をもて自殺するに到りしもの、憎むべし。



どいはい、いへ、涙多き者より見あは、如何に、哀れある、身の上にあらずや、われ等は、彼れ自身、が手向けたる、撫子の花と、共に、彼れの後生を、弔はんと、思ふものあり。讀者は、幸に、われ等をもて、心の餘りに、弱きものと、あす

あかれ。  
をどしむる心を、辛らき戀わぶる。

身はいやしきも、隔てあき世に。

これは『被輕賤戀』とて、誠光の歌なり、われ、かの君を戀ひまゐらすれども、彼の君は、何事ぞ、わが身の卑賤あるを、輕んじ給ひて、わが戀ふる心を、空しくし給ひぬ、とて、失戀の結果、戀人を怨む者。古よりの諺にもある如く、『戀に、上下の隔ては、あき世に、あがる情あき人、やある。われ等は、歌の主人公と共に、いたくも、彼の君の無常を、怨まんとす。されども、讀者よ、年わかきものよ、己れの分を考へよ、猥りに戀するあかれ、あんぢ等のまこ

とに戀ふる人は、たとひ、高貴ある人にして、なんぢ等の、身は賤が、伏屋に育ちたりとするも、彼方こそ、まことの戀を知る人あらんには、恐らく、それに応ずべし、もし古への『高嶺の花』は、折りがたし、との、俚言を信として、あんぢ等の戀を、却けん程の、心強きものあらば、そは戀したりとて、せん術あし、否、寧ろ、戀ひ慕ふ、値あき人、あればなり。

終にかゝるうさにも、あらば、何か我  
思ふころの底を見せけむ。

といふ歌『玉葉集』に在り、教良女の作るところ、戀ひしと、云ひそめても、彼方は、うけひかぬものから、われ、何故に、ふかき、わが心の水底を見せたりけん、かゝるうさになると、知りあは、魯かしや、言ひ寄らざりけんを、と、歎つは、心弱き女性あどには、よく、思ひ出づ可きところあるべきも、われ等は、かゝる淺き戀あらば、さまで、聖く、尊きものに、あらじと思ふあり、蓋し



戀たるや、その感情の高潮あるときに於いては、人目の關あらざればなり、わが思ふ人の爲には如何なる苦辛も喜んで奉ずべければなり、戀人より捨てられたりして怨まざるべければあり、彼を戀ひて、彼を承けひかぬとて、わが心の底を見せたるを悔ゆるがごときはまことの戀にあらす。これ等は、夫の淫靡俗をなしたりし藤原時代の戀あり、然らざれば『しき妙の枕にのこる移り香をわが身にしめてひとりかもねん』といふ元祿時代の戀あり、真心より湧き出づる戀は、さる淺きものにはあらざるべし、歌は平板おれども『君を措きて誰にか見せんわが心』といふらんやうなる決心おければ、そを戀とはたどふ可からざらん、われ等は、戀ひて死なんとするもの、失戀して決死するものに對して、却つて、より多くの同情を表す。

人車が丁度隆慶橋の東の畔を、諏訪町へ曲らうと云ふ角の少し手前

の處であつた秋夫が不圖橋の上を見ると橋の上に深張の蝙蝠傘に上半身を掩うて川の中を覗いて居る女を見掛けた。『おやッ』と秋夫は覺えず斯う云つて、瞳子を凝らした。

橋の上の女は黄八丈の書生羽織にお召の小袖を着て居るのであるが、その羽織の縞も着物の縞柄も、秋夫の眼には何うも覺えがあるのだ。又手は倭文子が自分が今日茨城へ行くのを何時か探り知つて、餘所ながら見送つて呉れるのであるかと、斯う思ふと、直ぐにも人車から飛び下りて、走つて行つて、抱上げて、自分の眞實の心を知らして遣りたい。あの有様を見て假令、何程の支障が出来やうとも、素より頓着す可きでないと思つて、既に飛び下りやうとしたけれども、人車は早くも角を曲つて、橋の上の女を後に見るやうに成つた。此の間は、つと思ふ間も無い。あなやと振返ると、直ぐ秋夫の次の車に乗つて居た



道代も其次に居た蝶子も振り返つて居た。橋の上の婦人は蝙蝠傘を  
 稍斜めにして、屹度此方を見送つて居た。

『兄さん。』と車輪の響にも紛れず斯う呼掛けたのは道代で、秋夫に顔を  
 合するより手巾で顔を押へた。

秋夫は唯茫然と見返つて居る間に、もう人車は又次の角を曲つて橋  
 上の美人の姿を失つて了つた。

あゝ、これ『縁不縁』の中の一節にあらずや、秋夫と倭文子とはかたみに戀  
 ひ慕ふ中ながら、二人とも親の心に任せて、倭文子は未だ嫁かず、秋夫は  
 他より嫁を娶らんとて、今日しも車を列ねて、親戚のものと縁家にゆく  
 を何處より聞き出しけむ、倭文子の知らぬ顔して見送ると云ふは、如何  
 に哀れある筋にはあらぬか。彼の女はいとも深く秋夫の身の上を戀ひ  
 秋夫が新しく迎へたる花嫁と共にいと睦しげに暮らせる様を時々

忍びゆきて探り見しといふ記事も、その後章にはあるあり、失戀は、かく  
 のごとく執着あるをもて尊しとす、然らざれば悟脱するをもて聖しと  
 す、かの朝に戀ひて夕べに忘るゝが如きは、これ誠ある戀の心とも思は  
 れず、されば戀ひ慕ふ人より却けられて、その翌日にいたれば、早くもそ  
 の人の事を打ち忘るゝやうなる失戀は、われ等、これを極めて賤しき劣  
 情ありとして、飽くまで排斥せんと欲するあり。

あゝ、世の失戀に泣くものよ、失戀に泣くものよ、御身等の胸の中には、賸  
 佳人佳人、嚳太守、嚳妾身、任君活、妾身、任君殺、妾身、有阿郎、在、妾心、不可奪、賢  
 髮在手、乱似絲、木蘭舟中、斫蛾眉、遺恨、不知深、幾尺、三又之、水終古、綠の、決心  
 ある乎、妾すでに阿郎の在るあり、何ものか能く、妾の心を奪はんとは、ま  
 ことに強き心ながら、此決心あくして、生意氣にも人を戀ふるは、己の分  
 を知らざるもの、素より戀を却けられたりとして、それを怨む、價値もあらざ



る可し。

あゝ世の失戀に泣くものよ、まことの失戀に泣くものよ、寧ろ、大に泣け  
大に泣きて焦れ死ねよ、世は浮薄あり、輕佻あり、かゝる浮世に生き永ら  
へて失戀に泣かんよりは、寧ろ死せよ、舌咬み切りて死せよ、われ等は、な  
んぢの爲めに同情の涙を灑ぐに吝あらざるものなり、否、われ等は、なん  
ぢの爲めに、なんぢの墓を營み、なんぢの墓前に、あんぢの爲めに、花の一  
束を手向けんとす。あゝ世の失戀に泣くものよ、あんぢあらでは、わが流  
るゝ涙を呑みて、あんぢに、死を勸むるに到りし心の水を汲むこと能は  
ざらむ。世の男よ、女子よ、わが友とちよ、いざ去らば。

### 戀と厭世詩人

われ等は、胸中の理想として、詩人が圓滿なる戀を得ることを信ず。そは、  
世の中に、いと、高尚ある、天の使命を齎らせるもの、詩人に若くは、なく、  
人の中に、いと、博大なる神の意志を表はせるもの、戀愛に如くは、なけ  
れば、あり。

されども、われ等は、こちたき論理の証明として、歴史の威力を認めざる  
可からず、總ての論理も、斷定も、事實に於いて証明し能はざる限りは、之  
れを是認する能はずとせば、吾れ等は、誠に口惜しきことあるれども、思想  
と戀愛とが調和しがたきことを主張せざるを得じ、如何に傷ましき多  
くの事實が、われ等の前に提供せられて、此の言の立証たらんとするか  
を見よ——疑ふものは、古への詩家の列傳を見よ、世に詩人と持て囃さ



れて一代の精神を集注せしめし程の人は、ことごとく圓滿なる戀の俤を見る能はざりしにあらすや。バイロン然り、シエレー然り、ミルトンもまた殆んどその畧に陥いらんとし、カーライルは死後にいたりて、台榭花の笑まはしからざるを、發見せられしにあらすや、あゝ、人誰れか、此の事實を目睹して、詩人と戀愛との調和よろしきを認め得るものあらん、われ等も併て一たびは理想と現實との諧和を期待したりし結果、此の説に絶對ある反抗を寄せしとありたれど、手を胸にして、つらく、致ふれば、断然として、其の誤謬あるを悟らざるを得ず。

事實は、かくの如く。理論を語りされど、われ等は、何故に所謂厭世家あるものは戀を全うすること能はざる乎、その原因を究めざるべからず。唯漫然として、歴史によりて、かゝる大なる問題を論斷するに憚びず。いざ、らば、姑くわれ等をして、その基因を原ねしめよ。

或る人は云ひたりき、詩人は、男の中に尤も女々しきものあり、感情の鋭きものあり、些細あることの爲めにも、涙を惜まず、僅かあることの爲めにも怒を發す、詩人は、げに、男の中にて、尤も女性に近きものあり、されば、戀の對者ある女子とは、同性相忌むところよりして、綯繆を完うすること能はざるありと。されども、これ一を見て、二を見ざる、淺薄なる議論のみ、われ等は、これを是認すること能はず。

論者あり、又云へらく、米國サンフランシスコの女子には、神經質のもの最も多し、されども、これ獨り、桑港に限りたるにあらす、總ての女子は、みな、神經質あり、而して詩人は、男性の中にて最も多く神經を勞するもの、の如し、さればにや古より文人墨客と稱せられたる人には、神經質のもの頗る多く、その病に罹りたるものすら、尠からず、かゝる點よりして、詩人は、同氣相忌み、合歡の快樂を享くること能はざるありと、嫉妬や、疑惑



や猜忌や、これ等あらゆる不徳は、神経質あるによりて、惹き起さるゝ場合多し、殊に心の狭き女性において、われ等は、その最と、甚しきを見る。故に、相思相愛より成立する所の戀愛は、詩人と女性との間に於いて、完うせられ難しと云ふは、やゝ眞に庶幾き説あるべけれど、われ等は、いまだ、ことごとく此の議論を信すること能はず。そはこれ以外に於いて大なる動機のあることを信じて疑はざればあり。

抑も詩人とは何ぞや、塵ひぢにも譬へつべき夢の世の中に珠のやうなる思想を懷きて聖くも崇き、藝神ミコトの膝下に、その一生を送るものから、境遇や家庭や、性質の差異によりて、胸の思ひは三種に分れつゝあるものゝ如し。即ち一は樂天主義にして、一は厭世主義あり、前者は、如何ある場合におきても、徳義と幸福とは一致するものありと云ひ、後者は、またく、それに反對せる見解を下して曰く、悪人は幸福を受け、善人は不

幸に陥る。試みに見よ、節制を重んずる者も、病魔の侵すところとありて、塵の上に苦吟するにあらずや。道を守れる君子は、社會の外に追ひ放たれて、好悪なる小人は富貴を得、傲然として華軒香車に住まひ、樂しげに日を送るにあらずや。昨日は、膝をまじへて、樂しく物語りし友ごちの、今日尋ねゆきて見れば、慘まじや、急病のために敢あくありて、家族のものが咽び泣く前に、冷めたき骸を横へつゝあるにあらずや。今日は、夫と呼び、妻と喚びて、浮き世の辛さを知らぬ身も、明日は不測の災に罹りて、運命の前に仆るゝとあしとせざるにあらずや。吁、誰か、此の世を樂しどはする、吁、唯か、人の身を悲しからずとは云ふげに、雙が岡の法師も、いひけんごとく、仇し野の露消ゆるとき、かく鳥部山の烟り立ち去らでのみある世の慣らば、物の哀れはあからまし。されども運命の波は、絶えずうち寄せ來たりて、小止みあぐ、人の世を襲へるに非らずや。儻し、之をしも



徳と福との一致せるものなりと云はゞ、天下到るところ、それからざるはあけん。されども、まのあたり、此の不権衡ある世の有り様を見ては、われ等は、遂に悲觀せざるを得ず。如何にゲーテ (1749—1832) が世俗的聖書かりと稱したるライチク、フックスの昔物譚を見よ、われ等の説を証明して、餘りあるにあらずやと。これ世に拗ねたる厭世家の唱ふるところ、半面の眞理は含みたれど誤まれる節も、また、少なきにあらず。獨逸近世の倫理學説は、巧みに兩者を融和して、所詮は福德の一致に歸すること、を是認せり。かの、ベルリン大學の教授なるパウルゼンのごときも、其の著 *System der Ethik* および *Grund-begriffe und Principienfragen* において、その旨を述べたりき。而して、幸福と云ふ字の意義は、さまざま、われ等も、われ等は、之を解釋するに中りて、外延的とあさんよりは、寧ろ内面的となすの、けだかき、に如かずと思ふ。既に幸福の意義を、かくの如く解釋しあば

『正義の自然的決果は、幸福にして、不義の自然的結果は、不幸なり』と云ふホッブス、スピノーザ、ライブニツク、オルフ、シヤフツベリー、ヒューム等の言葉を賛するに於いて、胸中の考察を要するにも及ばざるべし。されど、所謂厭世主義の俘とあれるものは、逆も、これ等の説を信ずること能はざるべし。彼等は既にこの世を擺脫したり、人を冷酷あるものと思へり。されば、如何に、光榮ある言葉も、事實も、彼等の心と齟齬せるものからんには、彼等は斷じて、之を信ずるの寛容あるとあし。さはれ、厭世詩人が抱ける理想は、遙かに現實を遠ざかりて、いとも氣高きものにしあかれば、彼等の眼に見ゆる人間や社會は、みな、豆のごとく小さく、糞のごとく穢はしく、一として彼等を満足せしむるものは、あらざるべし。彼等はまた、かくの如く世を卑しむと同時に、名譽も、利得も、此世に属する一切のものは、捨て果て、毫末の希望も、あらざるべし。然るに、愛と戀とは



此の頑強ある厭世詩人を生擒して、小さき胸の裡に煩惱の火を燃やさしめ、果敢あきあがらも、希望の光明杳々たる道途の前方に認めしむ。花笑ひ鳥謳ふ春さへも氣鬱して、堪へがたく、孤筇飄然英國を立ち出で、遂に劔を提げて、グリーキの獨立軍に合し、遂にミソロンギに於いて客死したるバイロン (1788-1824) さへも戀の爲には、もの狂はしくあり、情こめたる文の百つかを、戀人の許に贈りしにあらずや。

されども、一たび戀愛の小成して、夫婦ある名の下に同居をあすに至れば、その快樂は理想の半ばにも充たず、厭世家をして、いたく落膽せしめ、激甚ある失望の結果、ふたゝびもどの憂鬱に回りにて、渠等は、遂に、一生救ふべからざる不具者とはあり、了るあり。近世の、やさしき詩人北村透谷は、此の間の消息を傳へて、云へらく、

怪しきか、戀愛の厭世家を眩せしむるの容易あるが如くに、婚姻

は、厭世家を失望せしむること、甚だ容易あり、そも、厭世家あるものは、社界の規律に違ふこと能はざる者あり、社界を以て家となさざる者なり、『世に愛せられず世をも愛せざるものあり』 (I Love not the world, nor the world me) 繩墨の規矩に掣肘せらるゝこと能はざる者あり、普通の快樂は、以て、快樂と認められざるものあり (It is pleasure is not that of the world etc) 一言すれば、彼等が穢土と罵るこの娑婆に於いて、社界と云ふ組織を爲すべき資格を缺ける者あり、故に多くの希望を以て、多くの想像を以て入りたる婚姻の結合は、彼等をして敵地に踏入りしめたるが如きのみ、彼等が明鏡の裡に、我が眞影の寫るを見て、益厭世の度を高くすべきも、婚姻の歡樂は、彼等を誠信と、樂天に導くには、力足らぬなり。

彼等は人世を厭離するの思想こそあれ、人世に羈束せられんこと



は、思ひも寄らぬところあり。婚姻が彼等をして、一層社界を嫌厭せしめ、一層義務に背かしめ、一層不満を多からしむる者。是を以てあり、かるが故に、始めに過重なる希望を以て入りたる婚姻は、後に比較的の失望を招かしめ、慘として、夫婦相對するが如き事起るあり。女性は、感情の動物なれば、愛するよりも愛せらるゝが故に、愛すること多きあり、愛を仕向けるよりも、愛に酬ゆるこそ、其の正當の地位なれ。葛蘿とありて、幹に纏ひ、蝨はるが如く、男性に倚るものあり、男性の一舉一動を以て、喜憂となすものなり。男性の愛情の爲めに、左右せらるゝ者あり。然るに不幸にして、男性の素振に、己れを嫌忌するの状あるを見れば、嫉妬も萌すあり、廻り氣も起るあり、恨みも苦みも生ずるあり、男性の自ら繰戻すにあらざれば、眞誠の愛情或は外れて、意外の事あるに至る可し。而して、既に社界を厭へるもの、破

壞的思想に充ちたるもの、世俗の義務及び徳義に重きを置かざるもの、即ち彼の厭世詩家にいたりては、果して能く、女性に對する調和を全うし得べきや。

建設的社會に對して破壊的意志を抱き、人世を厭ひ、人間を避くる詩人が胸は、さあがら、五月雨の空の似き乎。迷の雲むら／＼と立ち騒ぎて、眞實の日光を遮斷し、一切冥蒙として、身はこれ闇中の一黒點、東西すら辨ずること能はずして、空しく、狼狽の醜態をどゞむ人、此の時、誰れか完き意識と、全き感情とを保ち得んや。かく厭世主義の擒とありて、徒らに悲歎の聲を發するもの、争でか、この温かく、聖く、優しき戀愛の心を解得せんや、その合歡綯繆を全うせずして、離別の遺恨を千載に貽すもの、洵に故あるには非るべき乎。われ等は、バイロンの傳記を繙くごとに、恒に、毎に、此の感に打たれて、悵然として歎息せざることをあし。



君の女よ、たんぢの足は鞋の中にありて、如何に美はしきか。汝の腿はまろらかにして、玉のごとく、巧匠の手にて作りたるがごとし。あんぢの臍は美酒の飲くることあらざる圓き杯盤の如く、あんぢの腹は積みかさねたる麥のまはりをもてかこめるが如し。あんぢの兩乳房は、牝鹿の雙子ある二つの小鹿の如し。あんぢの頸は、象牙の戍樓のごとく、汝の目はヘシボンにて、パテラピムの門のほどりにある池の如く、あんぢの鼻はダマスコに對へるレバノンの戍樓の如し。あんぢの頭はカルメルの如く、あんぢの頭の髪は紫色のごとし、王の垂れたる髪につかがれたり。あゝ、愛よ、もろく、快樂の中にありて、なんぢは如何に美はしく、如何に悦ばしきものあるか。あんぢの身の長は棕櫚の樹に等しく、あんぢの乳房は葡萄のふさのごとし。われ謂ふ、この棕櫚の樹に上り、その枝に執り

つかんと、あんぢの乳房は葡萄のふさの如く、あんぢの鼻の氣息は林檎のごとく、匂はん。あんぢの口は美酒のごとし、わが愛する者のために滑かに流れくだり、睡れる者の口をして動かしむ。われはわが愛するものにつき、彼はわれを戀ひしたふ。わが愛する者よ、われ等田舎にくんだり、村里に宿らむ。われ等夙におきて、葡萄や芽ざし、蒼やいでし、石榴の花や咲きし。いざ葡萄園にゆきて見ん、かしこにて我れわが愛をあんぢにあたへん。戀茄かぐはしき香氣を發ち、もろくの佳き果物、古き新しき共にわが戸の上にあり、わが愛するものよ、我れこれをあんぢの爲に貯へたり。

吁、是れソロモンの『雅歌』のいくさりにあらずや。如何に、その文字の美はしく、思想の清らかあるかを見よ。戀はげに、かくの如かるべし、かくの如く、温かあるべし。戀は妬まず、憤らず、欺かず、淫せず、永へに墮つることな



かるべし。されど、こは素と男性と女性との間に、成り立ちたる、相思の情にして、一種の感激 Inspiration あれば、何れか一方のもの、冷却しなば、恐らくば、完うせらるゝと能はざるべし。あゝ、猥りに浮き世に拗ねて、人をも身をも顧みざる厭世家よ、鉄よりも胸の冷やかかる厭世詩人よ、ねがはくは、永久の冬夜より脱れて、温かき春の戀に酔へよ。

初 戀 と 少 女

空ゆく雲を望みても、流るゝ水を眺めても、心のあるらんやうに、思ひあさるゝは、十六七の乙女が身の上あり。彼等は、ありとあらゆるものを、皆お情のふかきものとあし、こを自の身に分賦せられんことを願ふ。彼等は、他を愛せんよりは、寧ろ、他より愛さるゝを嬉ぶものあり。されば、涙あり、血ある人の、彼等を受するに逢ひあはば、彼等は、欣然として、それに酬ゆるところあるべし。あゝ、優しき少女よ、御身がいただける其の心は、珠よりも美はしきものあれば、永へに失墜することあかれ、而して、彼等の人に愛されんことを望むは、その性の然らしむるところあり、もと、男性に對する女性は、諸べての場合において、所動にして、能動に非らず、彼等は、男を心に頼みて、そが外に勤むる間は、内に在りて、家を治むるを、職分とす。



るものあり。あゝ、やさしき女性よ、御身等の人より愛せられ、人より憐ま  
るゝは——優美ある價值を有する所以のものは——ひとへに、從順と  
媚悦との二つの温和しき性情を保ちたればあり。されば御身等は、あく、  
までもその性情に適ひたる、行動を繼續せよ、かの、妄りに、男性を凌ぐべ  
く、くさくさの企てを爲すものに、傲ふこと勿れ。

されども、年若き乙女等は、多くは輕佻の行を慎むと能はざるが如し、俗  
語に所謂「女の淺智慧」は、此の時代に於いて、最も多く表現さるゝあり。而  
してわれ等は、生理的關係より見ても、世のあり様より歸納しても、妙  
齡の婦人は、賢、不肖、共に、み、あ、心、の、自、ら、浮、き、來、り、て、故、あ、き、に、嬌、然、と、し、て、  
笑ふこと、多きを、知る。かの『箸が轉がつても、可笑しい』とは、即ち、これ、を、云、  
ふものあるべし。かゝる時代には、よりく戀の間路に迷ひて、ほとんど、  
その恒心を失ふことあるべし。そは、自らを愛し、ぐるゝものに對し、多大

の感謝を表はす結果、一切を忘れ果て、ひとへに、應酬せんと欲するが  
爲め、他を顧る進なきに到ればあり。されば、その行は惡むべしと雖も、ふ  
かき心の底を見るに、まことに、憐むべきものあるなり。

かるが故に、われ等は、世の人の、殆んど總べてが、排斥せんとする、これ等  
の戀をも、いと寛容ある眼を以て觀取し、恕せんとするものあり。そは、  
品性よりもむしろ、感情の重んずべきものあればあり。さりながら、こは、  
場合によるものあれば、われ等は、絶對に、玄かく言ふものには非らず。か  
の三光院の歌に、

われながら心のおくも知らぬ哉

きのふはあらぬ今日の思ひに

といふもの、即ち此の間の、いはんと欲して、いふ可らざる、感情の秘鑰を  
謳ひたるものにあらずや。嗚呼、この人を戀ふる刹那の、こゝろ、そは、一種



のインスピレーションにして、動機の何物あるかを知らざれば、難かるべきも、思ふに、愛さるゝを喜ぶの一念なるべし。此の時に於いては、後法性寺入道が詠みたりし「入りそむる戀路は末や遠からむか、ねて苦しきわが心かな」といふ思慮もなく、考察もなかるべし。たゞ彼の「人戀し」といはんやうある、茫漠たる感情が、その胸裡を往來するのみあるべし。

あゝ、初戀に胸を苦しめて、人にも語らず、われ獨り、心を惱ます少女子よ、ねがはくば、どこしへに、その思ひを變ふることあらざれ。初戀こそは、げに乙女の純潔を表示するものにして、その間、半點の邪心なく、一片の汚念なきものなればあり。このときこそは、身をも棄て、名をも抛ため、財も位も顔を粧ふ白粉も、身を飾る紅裳も、ことごとく打ち捨つるを辞まざるべらなれ。また、如何ある、艱難も如何ある、苦辛も、敢て厭ふところにあらざるべし。その眼中は、たゞ、戀しき郎の俤をどゞむるのみ、その胸裡

は、たゞ、慕はしき君の心をおし量るのみ、此の二個の他には、何等の意志もなく、何等の思考もあかるべし。而してその二個の、あやしき俤ど、あやしき心とは、時に相合して、いたくも腦髓を刺撃し、身體中の血しほ、ことごとく湧きかへり、涙泉溢れて、ぼろ／＼と眼より流れ、心は痛くもかき乱さるゝならん。吾等は、惟ふ、この瞬間の彼等の心は、獻身的にして、郎を愛慕する外、一の打算的要求あかるべし。彼の君は、たゞひ、われを愛し給はずとも、われは、痛くも彼の君を愛しなむ。彼の君、たゞひ、刃をふり翳して、われを斬り給はんとも、われは、甘じてその下に伏すべし。何を、君のころの上を、踏ひ、まゐらす、違あらんやと思へることを。アーピングは、嘗て、*The rose of the alhambra* に於いて、この間の少女の心を描きしが、單純、可憐ある、彼等の性質を發揮して、眞に迫りたるを覺ゆ。いま、こころみに、之を抄譯せん。



ともく、此の小娘は、心がら、最とも貞實にして、一點の邪念とては  
 あらぬ上に、義理堅き一人の叔母の、嚴酷ある監督の下に育ちたる  
 ものありけり。されども、彼れは、あはれ、初戀が、囁く聲に、滿胸の血を  
 湧かさざるを得ざりき。あゝ、何れの處にか、初戀に胸を轟かさぬ處  
 女の住むべきや、かくばかり、やさしく、素直なる、飾り氣のあき少女  
 も、一たび、少年が言はんとしては、言ひ兼ねて、口籠るさ。女の唯事に  
 あらぬを見れば、まだ、かゝるためしなき身にも、誰より聞きしどに  
 は、あらぬぞ、自ら、その何故あるかを、どく、曉り得つ。生れてより、こゝ  
 に、初めて、己れが、足下に、かくばかり、優れたる戀人の、横はれるを見  
 て、少あからず、嬉しく、思ひ、覺えず、心を躍らしたりき。

誰より、教へられしとは、あらぬぞ、自ら、そのわれを戀ひたることを、曉  
 り得て、覺えず、心を躍らしたりとは、如何に巧みある筆致ぞや。初戀は、げ

にかくの如きものあるべし、今まで、戀とは、何ものあるやを知らざりし  
 身の夢か、幻か、われを愛しく、男の現にわが前に在るを見ては、滿身  
 の血の躍らざらんことを欲するも、得べからじ。

まだおげ初めし 前 髪 の

林檎のもとに 見えしとき

前にさしたる は な 櫛 の

花ある君と 思ひけり

やさしく白き 手をのべて

林檎をわれに 與へしは

薄紅の 秋の實に

人こひ初めし 初じめなり

わがこゝろさき ため息の



その髪の毛にかゝるとき  
 たのしき戀ひの さかづきを  
 君が情に 酌みしかあ  
 林檎島の 樹の下に  
 おのづからなる 細道は  
 誰が踏みそめし かたみぞ  
 問ひ給ふこそ 戀しけれ

げに、初戀にとるところは、くさくさあるべけれど、われ等は、その純潔を  
 るをもて、第一位に措かんとす、それ、かゝるためしのあらぬ時は、素より  
 戀に伴ふ所の汚れたる念慮をおこすことなく、ひたぶるに、人を戀ひ慕  
 ふのみなれば、その感情は醇粹無垢にして、一點の塵埃をだにとめざ  
 るべし。あゝ、初戀に胸ど、いろかして、顔にうす紅の色を抹するもの、眸中

の血は如何に騒ぐやらむ、汝が手のいたくも打ち顛へるを見るありや  
 よやさしき少女よ、少年よ、何ぞしかく、思ひを恐怖に馳せて、躊躇逡巡  
 せる、乙女よ、怖るゝこと勿れ、進んで、わが戀ひ慕ふ男の頬にくちつけし  
 て、その花のやうある唇につけられたる、口紅をうつせよかし。少年よ、畏  
 るゝこと勿れ、前んで、わが戀ひ慕ふ女の側に寄り、そのやさしく、白き手  
 をとりて、わが身にわきかへれる血潮の中に潜める、愛のこゝろを女に  
 分てよかし。恐怖は、いつも、初戀には伴ふものながら、心に悶えて苦しま  
 んよりは、むしろ、その満腔の戀愛を披瀝して、男は女の、女は男の、腹中に  
 推すのまされるに若かず、たとひ世の人は笑はんと、譏らんと、怖る  
 るどころにあらず、戦のくどころにあらず、戀せよ、しかも聖き戀せよ、戀  
 は上帝がこの世に與へし、與奮勵あり、若しこの世より戀を除き、あは恐  
 らくは、われ等人間は、枯死せん。あゝ、われこの筆を秃にしても、初戀の美



を讚めたいへざるを得じ。

女 性 と 戀 愛

宇宙の間、優しきもの數多し、されども、女性の如く優しきものは、尠か  
るべし、醜草、茫々と生ひ茂りたる荒野の中に、一もと咲ける、美はしの小  
百合の花にも、まさりて、いと静やかに、且つ、優さしく思はるゝは、男一  
人を頼りとして、有らゆる希望も、數かぎりなき慾求も、ことごとく、打ち  
捨つるを、辞まさる、女性が、身の上あり。

世には、正しき人道を外れて、邪まある、悪魔の疆に入り、詐欺、姦淫、盜竊、を  
ご其の他、あらゆる罪科を犯して、恬として、心に恥ぢざる、鬼の如き女性  
もあるめれど、これ等は、云ふも、筆の汚れあり、寧ろ論外として見るこそ、  
解釋の正鵠を得たるに、庶幾からめ。

されど、厭世主義、Pessimismus に、近き想を抱けりし、昔の聖人は、みあ、女人



を、罪深きものとして、將たまた濟度すべからざるものとして、いたくも之れを排斥したるもの、如しつらく、其言ふところを攻ふるに、何れも一應の理りありて、首肯すべき節あきにあらず、されども、これ理あるに似て非あるものには、あらざるあき乎、吾等は、いたく、女性の身に同情の涙を灑ぎて、釋迦、孔子あとの言葉をも否定するに躊躇せざるものなり。釋迦によりて創成せられたる、佛教は、女人を見ること、宛ら蛇蝎の如く、これをもて、罪業を作る原因とあし、したゝかに、罵詈訛刺を加へて『惑哉、肉眼、吾今觀之、從頭至足、無一好也』と云ふに至る、暴もまた甚しきかあ。若し温かなる慈愛の眼を以て、觀れば、女人は決して慙かる醜きものにあらず、秀麗なる外形と、優美ある内容と、共に、人間美の極粹として、見ることを得べし、されども、女人は、多くの場合に於て、偏狭あり、頑迷あり、故に嫉妬心ふかく、また怨みの念ひつよし、され、こはその半面に現はれた

る、女人の性情にして、残る半面には、愛好すべきところあきにしもあらず、人は素と感情を有し、意志の活動するものあれば、木匠が鋸もて木をひくが如く、規矩を正しうすべきにあらず、よし之を制せんとするも、自ら準繩の外に逸して、不義の汚行を侵すことあれば、一概に、難者の主張するところを、當らずとは謂ふべからず、たゞ吾等は、ひたぶるに、其の外延的罪惡を除却し去りて、裏面に潜める、善美なる言行を發揮せんことを冀ふものあり、

然れども、その何故に、女人は、しかく同情を表すべきものある乎、を説き明かさざれば、吾等の言葉は、奇を好む偏見なりとして、徒らに齋東野人の笑を受くるに止まりあん、いざさらば、姑く吾等をして、恐るゝことあ

く自由に述ぶるところ有らしめよ。



りて、一般に唱へらるゝに到りたれば、世の常ある議論をあすの要なかるべし。されば吾等は今こゝに、女性の美をたへて、憐ある身の上を辯護せんと欲するのみ。審美學 Aesthetics の上より見たる、女性の優美はこれを二個に區分することを得べし。第一はそれが内的生命にして、第二は即ちその外的形跡なり。されども、美學上、一般の定説として、外の美あるは、内の美あるに若かず。吾等は、花の如き顔よりも、珠の如き心を愛し、雪を欺く膚よりも、其の星にも勝さりて清く、やさしき情を慕ふ。ハルトマンも言ひけん如く、凡そ、個體の風格及び作用が、量の上より見て、過大もしくは過小あるときは、これを醜ありと云ひ得べきも、よりくは美感の作用によりて、これ等の醜き畸形は、世の常のものよりも、却りて大いなる美果を結ぶことあり、もと過大なる畸形に對する吾等の實感、殆んど總ての場合に於いて、我情の敗亡を來すべく、これに反して、

小なる畸形を對境として、は、いたく我情を昂揚せしむべし。故に前者は、げに吾等の畏るべき強敵にして、恐怖、愛愁、逃避あごの念慮を起さしめ、後者は、いとも慰むべき弱者にして、慈愛、保護、哀憐あごの心を牽らしむ。而して、弱者の、吾等をして、快感を起さしめむは、どのものは、管に憐むべきのみならずして、愛すべきものならざるべからず。蓋し弱者ともいふべきものは、吾等が生存の目的に適はざるが故に、強者と較べて、より多くの不快感を受くべければ、かり、轉じて、これを男女の兩性に擬するに、男は、強者にして、女は、弱者あること、疑を容るべくもあらず。されば、女の美あるは、その強く、壯あるにあらで、弱く、やさしき所にありぬ可し。弱しといひ、愛らしといふは、管にその外にあらはれたる外形のみならず、裏面、即ち、心の上にも現はるゝものあり。心の上にも表はるゝ『可愛』といふことには、二個の須要ある屬性あり、それは柔順と媚悦とあり、と



は或美學者の云ひしところ、吾等はその言葉のや、真にちかきことを  
 斷言するを憚らざる者あり。而して柔順と媚悦とは、己れより、より強く、  
 より大なる者の心に從ひて、敢て抵抗せざるの謂にして、女性の身に、最  
 も多くある例あり。吾等は嘗て聞きぬ、四五の若う人、うち群ひて、娶らん  
 とする理想の妻の、如何あるものあるやを語り合ひし時、一人の優しき  
 青年、立ち上りて、吾は、吾れを愛する女を、わが一生の妻とせん、心だに、わ  
 が此の願を満たすに足るものあらんには、その顔の如きは、問ふ所にあ  
 らず、と云ひければ、満座のもの、手を拍ちて、之を賞め稱へたりと。げに、心  
 の優美だにあり、ちかば形の上の優美は、あからんととも、尙ほ愛らしく、優  
 しかる可し。われ等は、徒らに裝飾に心を用ひて、思想の涵養に意を注が  
 ざる女の、世の中に多きを見て、胸の裡、安からざるを想ふ。ざるにても希  
 ましきは、ハルトマンの言ひし *Schöne Geschlecht*、とて、ひとへに、心の美は

しき女あるかな。

世の人、口を開けば、女を罵りて、智惠淺く、思慮短しと云ふ、餘りに酷には  
 非るべきか、乞ふ、涙ある一篇の歌を見よ、誰か亦作者が女の身の上に、溢  
 る、許りあるシンパシーを灑ぎて、いたくも、其品性を警めたるに、目を  
 注がざるものあらん。

黒 髪 長 く やわらかき  
 女 ぞ、るを 誰れか知る  
 男 の 語 る 言 の 葉 を  
 誠 と 思 ふ こと 勿れ  
 處 女 心 の 淺 く の み  
 言 ひ も 傳 ふ る を か し さ や  
 亂 れ て 長 き 髪 の 毛 を



悲しむ勿れ　わがともよ  
 戀する時と　悲　み　と  
 何れか長さ　何れ短　き

この歌は、たゞ戀の一斑を露ひたるものかれど、移して以て、全豹に擬するを得可し、げに處女ごころを淺ましと云へども、その深きは海にも優りて、いと優しからずや、女の生命は戀あり、憐なる女性の中より、戀の一字を除き、あば、残すところ、僅かに骸骨のみ、われ等は、胸に燃ゆる戀の火を鎮めかねて、狂ふが如き女を見る毎に、心強き男を怨まざるを得ず、あゝ、憐なる女人よ、姑く憫べかし、吾はやがて、御身の上に、大いなる神の祝福下りて、慘酷ある男子はその跡を斷ち、樂しきホームの快樂を受くるに到るべきを信す。されども、こは吾れ獨りの言葉にはあらず、『アルハムブラ』『旅人物語』『プレトスブリウヂ、ホール』『ワシントン傳』『ニューヨーク』

の歴史』スケツチブック』の著者として、米國々民より、多大の同情を享けつゝある、ワシントン、アービンズは、その著『斷腸記』のうち、女性と男性とのけじめを説いて云ふ。

Man is the creature of interest and ambition. His nature leads him forth into the struggle and bustle of the world. Love is but the embellishment of his early life, or a song piped in the intervals of the actor's life. He seeks for fame, for fortune, for space in the world's thought, and domination over his fellow-men. But a woman's whole life is a history of the affections. The heart is her world: it is there her ambition strives for empire; it is there her avarice seeks for hidden treasures. She sends forth her sympathies on adventure; she embarks her whole soul in the traffic of affection; and if shipwrecked, her case is hopeless—for it is



黄楊の小櫛に かきあげよ  
 あゝ月ぐさの 消えぬべき  
 戀もするとは 誰がことば  
 こひて死あんと 詠出でし  
 厚き情は 誰が歌ぞ  
 みちの爲には 血を流し  
 國には死ぬる 男あり  
 治兵衛はいつれ 戀の名か  
 忠兵衛も名の 爲めに果つ  
 汗昔より 戀ひ死にし  
 男のありと 知るや君  
 をんあ心は 彌やさらに

深き情の こもるかあ  
 小春は戀に 血を流し  
 梅川戀の ために死ぬ  
 お七は戀の 爲めに焼け  
 高尾は戀の 爲めに果つ  
 悲しからずや 清姫は  
 蛇とあれるも 戀ゆゑに  
 優しからずや 佐用姫は  
 石とあれるも 戀ゆゑに  
 男のこひの たはふれは  
 旅に捨て行く 情のみ  
 戀する勿れ 處女子よ



悲しむ勿れ　わがともよ  
戀する時と　悲　み　と  
何れか長き　何れ短き

この歌は、たゞ戀の一斑を露ひたるものかれど、移して以て、全豹に擬するを得可しげに處女どころを淺ましと云へども、その深きは海にも優りて、いと優しからずや、女の生命は戀あり、憐なる女性の中より、戀の一字を除きおば、殘すところ、僅かに骸骨のみ、われ等は、胸に燃ゆる戀の火を鎮めかねて、狂ふが如き女を見る毎に、心強き男を怨まざるを得ず、あゝ、憐なる女人よ、姑く憫べかし、吾はやがて、御身の上に、大いなる神の祝福下りて、慘酷ある男子はその跡を斷ち、樂しきホームの快樂を受くるに到るべきを信す。されども、こは吾れ獨りの言葉にはあらず、『アルハムブラ』『旅人物語』『ブレエトスブリウヂ、ホール』『ワシントン傳』『ニューヨーク』

の歴史』スケッチブック』の著者として、米國々民より、多大の同情を享けつゝある、ワシントン、マービン等は、その著『斷腸記』のうち、女性と男性とのけじめを説いて云へらへ。

Man is the creature of interest and ambition. His nature leads him forth into the struggle and bustle of the world. Love is but the embellishment of his early life, or a song piped in the intervals of the actor. He seeks for fame, for fortune, for space in the world's thought, and dominion over his fellow-men. But a woman's whole life is a history of the affections. The heart is her world: it is there her ambition strives for empire; it is there her avarice seeks for hidden treasures. She sends forth her sympathies on adventure; she embarks her whole soul in the traffic of affection; and if shipwrecked, her case is hopeless—for it is



實に此の言のごとく、男はいとゞ利害にさどく、野心に充たさるゝ者あれば、恒に危うき浮世のかけ橋を打ちわたりて、對岸の功名と利益とを収めんとする傾あり。されども、女は、やさしき情の世界に住まひて、そが一生の歴史を、愛と戀との二字もて填めんとする者なれば、一たびわが夫と定めたる者に對ひては、滿身の熱誠を捧げて、ひとへに、其の眷愛を得んと云ふのみあるべし。若し、それ、あはれある女性の、同情を戀しき男子に寄するや、眼中、父母、あゝ利害なし、尊き親も、珍しき寶も、わが慕ふ男子に較べ、あはば、厠の前に積もれる塵芥のみ、彼の君と添ひ遂げん爲には、一つよりなき此の身も、献ぐべし。况んや、胸を飾らん爲のダイヤモンドをや。なほ、况んや、簪笄をや。われ、若し、如何にしても、君と共に、双棲するを得ざるあらば、寧ろ、舌噛みきりて、死あん。夢の浮き世に、生き永らへて

忍び難き愛目に遭はんよりは、徐かに冥途の旅に赴ひ、闇き世界を探ぬるに、若かざるあり。

慙くとのみ言はんには、女の心狭きを笑ふものありぬべし。されど能く思へ、婦女の生活は、男の身の上にくらべて、いとゞ變化少なく、家居して内を治め、夫をして内顧の愛あゝ、自由に競争場裏に活動せしむるが、その本來の天職あれば、自ら浮きたる心の消えゆきて、物思ひに打ち沈みぬべし。されば、縦令その智慧は淺くとも、思慮、考察の時間を剩すにより、男子の如く、無謀なることを爲さざるも、胸裡に湧き來る、くさくさの聯想や感情は、幾たびもくゞ、その丹田に練り返されて、片時とても忘るゝ時あらざるべし。夫の資性輕佻にして、浮華を好む女の身は、吾等の興かり知るところに非らず。若し、常に嚙ぎ勝ちある、心の優しき女にして、一たび、悲愁の雲に頭腦を蔽はれ、面白からぬ中に、日を暮らすものありとせ



ば如何にして其の心を慰めんとはする。男子あらんには出で、鬱を散らすべきも、幽居するがつとめなる女の身には、それすら心に任せざるべし。然るに、その煩悶を除きて、沈み勝ちある胸の思を、安らげくする道たゞ一つあり。それは、異身同心ある男子の口より、やさしき言の葉を聞く事あり。婦女の愛は、よしや、絲の如くに亂れたりとも、夫が情ある一言に慰藉せられては、薄氷の春かせに、遇ふらんやうに、忽然として打ち解く可し。蓋し、女の此の世に生れしは、男子に愛されんが爲めあり、愛せられて錦囊の壁と重んぜられんが爲めあり、まかるに、儻し、不幸にして、戀を完うすること能はずんば、彼の女は、如何にして、其の心を慰めんとはする。思ふに、終生悶々として憂愁し、豊頬いつしか瘠せ衰へて、桃花の如かりし紅の色は、褪めてさ青くありまさるべし、あゝ、美はしく、やさしき女人よ、永しへに、花の姿を衰へしむること勿れ、飽くまでも、火のごと燃ゆる

る戀の心を消えしむること勿れ、よし、その花顔は衰ふるとも胸に湧き来る情の水を涸らすこと勿れ。それは、御身の命あればあり、靈あればなり。





## 歌 と 戀 と

六十八

われ等は、戀愛の美を讚美し、文學が此の世にあらん限り、それは絶好なる詩材として、永く詩人の間に重んぜらるゝことを信ずげに、滾々として、山のはざまより流れ出づる泉のごとく、戀はどこしへに盡くることさく、千歳の後までも、おほ男と女とを、その淵に投じて、戀の思ひを深くせしむ、あゝ戀愛は如何に美はしきかなど、われ等は、ここに、ソロモンの歌を繰りかへさいるを得ず。

わが國は文學の國なり、上は神話時代より、下は明治の今日にいたるまで、文學思想は、油然として國民の頭蓋の中に注入し、發しては玉の如き詩を作したりき、世は混沌として、未だ文學のあらぬ神代よりも、早や三十一文字の國詩ありて、畏くも須蓋雄尊は、稻田姫を娶り給ひし御時一

首の歌を詠み給ひき、いはく、

八雲立つ出雲八重垣つまごめに

八重垣つくるその八重垣を

と、思想の單純ある時代にありて、かくまで巧みに重複の語を用ゐて新たに室を清に築きしを祝ふよしの歌を作り給ふは、所謂ゼニアスのみ胸に充ちくししが爲あるべし。降つて、人代に及びては、社會的關係ますます頻繁とあり、果は、三韓、支那、あんど交通するやうにあり、文化大に開けて、遂に文字ある國とあり、宗教ある國とあり、いはゆる『もろこしの國さま』は、雜然として、わが國に注入し、純乎たる大和民族の思想は如何ばかり、變更したりけむ。されど、われ等は、今、これを詳説するの時を有せず、われ等は、ただ雜然として、わが國の詩人が詠みたりし歌を陳ねて、戀愛との關係を論じ、且つ、その批評をこゝろみんと欲するのみ。

六十九



さ、は、れ、わ、れ、等、は、そ、の、前、に、於、い、て、一、言、す、る、の、止、む、を、得、ざ、る、も、の、あ、り、そ、  
 は、わ、が、國、の、『戀、歌』あ、る、も、の、は、口、惜、し、く、も、純、潔、高、尚、な、る、も、の、少、く、あ、く、多、  
 く、は、こ、れ、を、心、の、上、よ、り、解、釋、せ、ず、し、て、肉、の、上、よ、り、説、明、し、た、る、の、傾、向、あ、  
 る、一、事、あ、り、さ、れ、ど、も、わ、れ、等、は、あ、は、『萬、葉、集』二、十、卷、の、中、に、於、い、て、神、聖、あ、  
 る、叙、事、詩、あ、り、抒、情、詩、あ、る、と、を、發、さ、て、わ、が、心、を、慰、め、ん、と、す、る、も、の、あ、り、  
 『讀、者、よ、若、し、か、の、忌、は、し、き』戀、歌』を、誦、す、る、を、欲、せ、ざ、る、も、の、あ、ら、ば、去、つ、て、  
 『萬、葉、集』を、讀、め、し、か、も、わ、れ、こ、に、そ、れ、等、の、歌、を、點、出、し、て、批、評、を、試、み、ん、  
 と、す、る、は、腐、敗、し、た、り、し、藤、原、時、代、を、痛、罵、す、る、を、此、上、あ、う、心、地、よ、し、と、思、  
 へ、ば、あ、り、恕、せ、よ、讀、者、。

夢路にも露やおくらん夜もすがら

通へる袖のひちてかわかぬ(詠人不知)

はかあくて夢にも人を見つる夜は

あしたの床を起きうかりける(素性法師)  
 君こふる涙しかくばから衣

胸のあたりは色もえあまし(紀貫之)

秋の田のはのうへを照す稻妻の

光のまにも吾やは忘する(詠人不知)

戀すればわが身は影とありにけり

さりどて人にそはぬもの故(詠人不知)

から衣きつ、馴れにし妻しあれば

はるく、來ぬる旅おしぞ思ふ(在原業平)

の如きは、辞を修むるや、織巧に失するものあり、また、あまりに單調あ  
 るもあれど、やゝ見るに足るものあり、『戀すればわが身は影と』の句およ  
 び『夢路にも露やおくらん』の句は、眞情として、これを見れば、あはれにも



亦やさしく、『君こふる涙しなくば』の句は、歌として面白しかるべし、されど、われ等は萬葉の『こひしきは戀ひも死ねどや玉銚の道行く人にこともつげん』といふ極めて單調にして、極めて平淡なる有りのままゝを謳ひたるを愛するものあり。

時鳥あくやさつきのあやめ草

あやめも知らぬ戀をする哉(詠人不知)

音にのみさくの白露夜は起きて

晝は思ひにあへずけぬべし(素性法師)

世の中はかくこそ有けれふく風の

めに見ぬ人も戀しかりけり(紀貫之)

見ずもあらず見もせぬ人の戀しくは

あやなく今日やあがめ暮さん(在原業平)

夕づくよさすや岡への松の葉の

いつとも分かぬ戀もするか(詠人不知)

こゝに掲げたる五首の歌は、修辭の上より論じ來れば、リベシヨンの句法を用ゐて、いとも巧みに、且つ華やかに歌ひたれども、若し、その内容を問ひあば、われ等は、いとも輕薄ある戀を描きたるものあり、といふに躊躇せじ。世は、もと篤實ある人のみを以て充たさるゝにあらねば、これ等の歌は、必ずしも拙なりとて排斥すべからず、まして材料採取の批難をあすことをや、されど、詩としてのヴァリウは重もに、その内容に在ることを信ずると共に、詩材もしくは、その構想は、いさゝかありとも、美の多量なることを喜ぶものあれば、これ等の歌の、卑しき、輕き戀を謠ひたるを讀する能はじ。

夕ぐれは雲のはたてに物を思ふ



あまつ空ある人を戀ふとて(詠人不知)  
ちはやぶる加茂の社のゆふだすき

一日も君をかけぬ日はあし(詠人不知)  
するがなる田子の浦波たゝぬ日は

あれども君を戀ひぬ日はあし(詠人不知)  
みちのくのまのぶもちずり誰故に

乱れんと思ふ吾あらくに(河原左大臣)  
つゝめども袖にたまらぬ白玉は

人を見ぬ目の涙なりけり(安倍清之)  
秋あらでおく白露はね覺する

わが手枕の雫なりけり(詠人不知)  
すまの海士の塩焼衣をさを荒み

ま遠にあれや君がきまさぬ(詠人不知)

君こそは聞へも入らじこむらさき

わが本ゆひに霜はおくとも(詠人不知)

此のうち『秋ならでおく白露』と『つゝめども袖にたまらぬ』の二首をのぞきては何れも自然の景情および神明の事をさしはさみて、盟誓の意をこめたるものゝ如し、此の時代に於ける國民の自然に對する一種の畏怖心は、も早や、おほ方衰へ居りたれども、おほ一部の人々には、上帝のやどる所と思はれたれば、それに對する畏怖敬虔の念は、むかしと大差あかりしあるべし、それを歌中に詠込みしは、或は眞心をこめたる心ありしやも知るべからず、兎に角、こゝに掲げたるは、眞情流露して、奈良朝時代の風あるを多とす。

いとせめて戀しき時は鳥羽玉の



花の衣をかへしてぞさる(詠人不知)

七十六

うたゝねに戀しき人を見てしより

夢てふものは頼み初めてき(詠人不知)

は最も優しき句にあらすや、われ等は、この二首の歌を誦して無邪氣ある主人公に同情を表するものあり、あはれ、きよく、をさなき胸のうち人戀ひしたふ心のみ深く、今は、將た常識をも失はん許りあるとき、戀人を見てしより、夢を誠と頼まんの、衣の裏きていをぬる夜は、戀人の來るてふ鄙の言葉を信じて、しかくして寐んもの、世には數多くあるめれども、われ等は、この歌の意の、何となく、やさしくて邪念のあきを喜ぶものあり。

河の瀬にさびく玉藻のみかかれて

人に知られぬ戀ひもするかを(詠人不知)

わが戀はみ山がくれの草なれや

しげさまされど知る人のあき(小野芳樹)

冬の池に住むには鳥のつれもなく

そこに通ふと人に知らすな(躬恒朝臣)

いかにせんしのふもぢづり月日經て

心のをとに乱れそめあば(通村朝臣)

包むとも忍ぶに堪へぬ涙とて

をさふる袖の色やかはらん(藤原爲世)

數ならぬ身のため惜しき浮名かな

つしむなみだも哀れとやみむ(藤原師兼)

人しれず下にゆきかふ芦の根や

君とわれどが心なるらん(讚岐)

七十七



誰れかさてあはれとだにもさく露

もらさぬ先にあへす消ちばもろかね

七十八

のごとき、みち、是れ、忍ぶ戀路に迷へるものにあらずや。われ等は、かの紫の色いといさえにし藤原時代に、倫道破れて、世は正義の二字を解せざりしにもかゝはらず、多少、淫靡のよからぬことを悟りて戀をするにも人目を忍びしものあるを見て、幾分か良心の存じたりしを喜ぶものあり、されども、渠等の忍びし戀は、今の浮かれ男が、仇し男を慕ふやうに、戀をもて、一種の玩具と見做したるの傾向あれば、われ等は、亦ほも、之を排斥せんとするなり。しかして轉じて、わが國の情史を繙くに、わが國人の所謂「戀」あるものは、あまりに聖く純らあるものにあらざりしが如し。夫の『萬葉集』時代はいざ知らず、『古今』以後の歌集に見るも、この言を証明するに足るものあらん。かくの如くにして、わが國詩界はいやしき戀

を歌へりしが、その戀の卑しきだけ、忍ぶ心も深かりしか。所謂「歌題」なるものは、くさぐさのものを材料としたるが中に、戀ほど多きはあかるべく、戀の中にて忍ぶ戀ほど多きはあかりけり。夫の『忍戀』といひ、『爲人忍戀』と云ひ、『忍親近戀』といひ、『忍通心戀』、『厭忍戀』、『忍切戀』、『忍絶戀』あんどいふも、みちこれ、一種の隱蔽的戀愛にして、うき名の立つを惜みし結果あるべし。かゝる乱れたる世にも、なほ、多少の社會的制裁はありけむ。頼母しきは正しき道義の光なるか。

うき身をば我だにいとふいとへた

そをだに同じ心とおもはん藤原俊成

つれなさに思ひよはると知せばや

さすが憐れむこゝろありやと(雅章)

そのこゝろ道にあふらし我を君

七十九



あひ思はずと思ひおこせば(源頼政)

こゝに掲げいだしたる三首の歌は、いづれもみな失戀を歌ひたるもの別けて、よしと云はん程の名歌にもあらねど、切ある戀の叶はずて、ひとりのみ心を痛むるさまは見えて、誦せん人の頭腦のうち、一種のシンパシーをおこさしむるは事實なり、何れの世、いづれの時にも、ことばりせめて哀れあるは、失戀に泣き、あんなのやさしき心根、われはいたくも、そをも悲しく思ふあり、かの『花は櫻のみかは』といふやうなる心多き人は、われ之れと語るを屑しとせず、われは、只『女一人に、男一人』てふ俚諺を信せん人に對ひては、心の底の秘密をも發きて、こゝちよげに語らんとはするなり。

ひとよにも身は朽ちぬべし橋姫の

袖やつれなく波にぬれけん(さねたか)

打ちわびて分や行まし道芝の

露よりさきに消えぬべき身は(みつあき)

此くれのつらき報も見せてまし

待たるゝ程のわが身なりせば(國冬朝臣)

よふけぬと思ひはすてし人やもし

人のしつまるほどを待つらん(平資盛)

夕されば人あき床を打拂ひ

歎かんだめとされる吾が身か(詠人不知)

これ等は、いはゆる待つ戀にもや、かの俚言にもあるらんやうに、『待つは愛いもの、辛いもの』の限りにて、戀人の來るを待つ心は、げに、やさしき限りあれど、それも、聖き戀を語り、あんな爲めあらば、よしいやしき情を遂げ、あんな爲めあらば、われ等は、むしろ憫笑せんとほりする者あり、この歌は、



藤原時代のものにはあらねど、一は元祿の代にありしもの、淫靡文弱の極度に達せしころの歌なればと、ひとしなみに罵しらんはつれあきにも似たるべし、されどもわれ等は、心よりして嬉ばん程の玉句には有らじと思はゆ。

かねてより人の心もしらぬ世に

契ればとてもいかゝ頼まん(爲冬)

かはらじの盟ひも人に頼まれず

まことありとは見えぬころに(ありよし)

花がたみめあらぶ人の數多あれば

忘られぬらむ數あらぬ身は(詠人不知)

猜疑は、不義あり、惡徳のきはめて大なる者なり、されは、互に猜疑せん人の仲は、必ずよからざるべし、まして、戀せる男女の間に於いて、かゝる思

ひの、はづかに、ても、こもり、居らんには、その戀はいかでか、全きを得んや、かの所謂『及を人の腹中に刺す』の赤心あくば、とても交情は完うせらるゝものに非らず、われ等は戀歌の題のうち『疑戀』といふ、いとも卑しき一つあるを見る毎に、身も心も千切らるゝ念ひするあり、おはれ詩人として、無味乾燥ある國民の耳に天籟の聲を吹き込むべき天職を保てる身の、かりそめにもかゝる賤しき思想を抒べ、かんはまことに、愧しからずや、われ等は、われ等の言葉の偏狭あるを知る、もし寫實主義より文學を解釋しなば、その描寫したる事の卑猥あるを咎むるにも足らじといはんは、理りある言葉あれど、われ等は、そを知りて、おは嚴に排斥せんとするもの、超絶的文學の普及を、主として參畫するものあれば、ありあはれ、眼の低き人、理想の卑しき詩びと、恕せよ、わが言の過激に失して殆んど狂に似たるを、されど、試みに讀め。



戀しきまゝに 家を出で  
 この岸より かの岸へ  
 越えましものと 来て見れば  
 千鳥鳴くあり 夕まぐれ  
 戀には親も 捨てはて  
 やむよしもあき 胸の火や  
 髪を毛を吹く 河風よ  
 せめてあはれと 思へかし  
 河波暗く 瀬を早み  
 流れて巖に 砕くるも  
 君を思へば 絶間あき  
 戀の火炎に かはくべし

きのふの雨の 小休あく  
 水嵩や高く まさるとも  
 よひくに泣く わが戀の  
 涙の瀧に 及ばじあ  
 知り給はずや わが戀は  
 花鳥の繪に あらじかし  
 空鏡の印象 砂の文字  
 梢の風の 音にあらじ  
 知り給はずや わが戀は  
 雄々しき君の 手にふれて  
 嗚呼口紅を その口に  
 君にうつさで やむべきや



戀は吾身の社にて  
 君は社の神あれば  
 きみの祭壇の上あらで  
 何に命を捧げまし  
 碎かば碎け河波よ  
 われに命はあるものを  
 河波たかく泳ぎ行き  
 ひとりの神にこがれなむ  
 心のみかは手も足も  
 吾身はすべて焔あり  
 思ひみだれて嗚呼戀ひの  
 千筋の髪の波にちがるゝ

あゝこれ今世の詩人、島崎春樹の君が謳ひし『おくめ』と題するものにあ  
 らずや、如何にそのやさしき言葉のうちには、ふかき〜戀の心のうち籠  
 りたるかを見よ。われ等は『しりたまはずや吾が戀は、花鳥の繪にあらじ  
 かし、空鏡のかたち砂の文字、梢の風の音にあらじ。』と強き〜言葉をば  
 ちちて戀ふるこゝろの深さを盟ひ、さらにその星のやうに優しく聖き  
 希望をのべて、『知り玉はずやわが戀は、雄々しき君の手にふれて、あゝ口  
 紅をその口に、君にうつさでやむべきや。』といふところ、心狭き女性の口  
 より出づる言葉として、まことにその適はしきを見るなり。  
 世の移りゆくに従ひて、人の心はいやます濁り、純朴ありける奈良朝時  
 代の風習は、早やその俤を見るべくもあらず、人の理想を謳はんための  
 歌すらも昔の姿は消えゆきて、傷ましや、題を設けて、それによりて詠ず  
 るに至りぬ。かくて、おは、金章玉句を得んとするは、さながら、木に椽りて



魚を覓むることく、海に漁して兔を獲んとするに均しかるべし。こゝろ  
みに、ソロモンの『雅歌』を詠ますや

われはシャロンの野花、谷の百合花あり。女子等の中に、わが佳耦の  
あるは、荆棘の中に百合花のあるが如し。わが愛するもの、男の中  
にあるは、林の樹の中に林檎のあるがごとし。我ふかく喜びてその  
蔭にすわれり、その實は、わが口に甘かりき。彼、われを携へて、酒宴の  
室にいれ玉へり、その我上に懸したる旗は愛ありき。請ふ、おんぢら、  
乾葡萄をもて、わが力をおききへ林檎をもて我に、力をつけよ、われ  
は愛によりて疾みわづらふ、かれが左の手はわが頭の下にあり、そ  
の右の手をもて我を抱く。エルサレムの女子等よ、我おんぢ等に、樟  
と野の鹿とをさし誓ひて請ふ、愛のおのづから起るときまでは、殊  
更に喚起し、且つ、醒ます勿れ、わが愛するもの、聲きこゆ、視よ、山及

び岡を躍りこえて來る。わが愛する者は、樟のごとく、また小鹿の如  
し、視よ、彼らの壁のうしろに立ち、窓より覗き、格子より窺ふ。わが愛  
するもの、われに語りていふ、わが佳耦よ、わが美はしきものよ、起て  
いできたれ、視よ、冬すでに過ぎ、雨もやみては、やさりぬ。もろくの  
花は、地にあらはれ、鳥のさへづるとき、すでに至り、班鳩の聲、われら  
の地にきこゆ。無花果樹はその青き果を赤らめ、葡萄の樹は花咲き  
て、その馨はしき香をはかつ、わが佳耦よ、わが美はしきものよ、起ち  
て出できたれ。磐間にをり、斷崖の匿れどころにをるわが、鴿よ、われ  
に、おんぢの面を見させよ、おんぢの聲をきかしめよ、おんぢの聲は  
愛らしく、なんぢの面はうるはし。われらの爲めに、狐をさらへよ、彼  
の葡萄園をそこ、おふ小狐をさらへよ、われ等の葡萄園は、花盛かれ  
はあり。わが愛するものは、われにつき、われは彼れにつく、彼れは百



合花の中にてその群を牧ふわが愛するものよ、日の涼しくあるま  
で、影の消ゆるまで、身をかへして出でゆき荒き山々の上において、  
樟のごとく、小鹿のごとくせよ、

あゝ、讀者、いかに清く、麗はしき歌ならずや、かゝる同情、かゝる愛感、を享  
けんもの、恐らく、まさに狂喜して我を忘るべし。われ等は、これをもて、か  
の有名なるエム、ジョンソンの、"Sympathy" よりも、あは、清く、麗はしき者  
とせむ。あゝ、何れの處にか、かくの如く、美しくしき心を謳ひたる詩のある  
あらんや。われ等は、げに、大三千世界ひろしといへども、この歌にまされ  
る清き、麗はしき、歌は、あらずと思ふあり。あはれ、習慣のために羈束せら  
れて、古例の外へ一步も出づること能はざる歌人よ、今、少しく思想を涵  
養せよ、理念を高尙にせよ。われ等は、あんぢ等に責むるに、ソロモンの歌  
を出だせよとは云ふものにあらず、そは酷あるを知ればあり、されども

われ等は、あんぢ等の何故に、赤人たらざる乎を答むるものあり、人麿た  
らざる乎を責むるものあり、家持たらざる乎を疑がふものあり。なんぢ  
等、われ等の追求にあひ、かく罵られて、あは且つ答ふるところを知らざ  
る乎、清く、麗はしき、尊く、高き戀のやまは、絶間なく、百花の咲けるあり、あ  
あ、心ある歌人よ、希くは、之きて戀の花園にいたり、多くの詩材を得來り  
て、汝が思想の源泉とあせよ、あんぢが、歌の内容となせよ。



## 情死と戯曲

九十二

血涙あき世の倫理學者は、偏に人間の品性のみを考へて、その感情の如何なるかを究めず、猥りに情死の不徳を攻撃するものあり、されど、されど、情死あるものは、さ程卑しむべきものならじ。眼あるものは、見よ、世に、悲しむべきもの、惨むべきもの、かすく、有れども、情死のごと、悲しむべく、惨むべきもの、多くあるや、を、あはれ、苦界の三つの大ある苦しみは、古より老病死と算せられたるには、あらざる乎、而して其の一つなる死の中に、此の情死をも含めるには、あらずや、あ、世の涙あき道德家よ、世の血あき倫理學者よ、御身のいはん所、ことく、謂はれあきには、あらねど、あまりに酷に過ぐるあき乎、われは、表面より人の内的意志を考ふる、と同時に、その裏面に潜める感情の微細を究めて、かすく、ある美の假

戀 愛 と 文 學

情 死 と 戯 曲

象を發かんと欲すわれ、今、元祿の昔にかへりて、近松巢林子が味方となるを、嘲り笑ふこと勿れ、いざ、われ等をして、情死が、何ゆゑに、爾かく美はしきものあるかを語らしめよ。  
われ等は、情死の美あるを、説かん前に、善美の衝突が世の中に、多々あり得べきことを、一言せんと欲す。缺陷多き人間と社會に對ひて、完全なるパラダイスの生活を、試みよといはんものは、餘りに高き言葉あるべし。争鬭、竊盜、詐欺すらも、絶對的に社會の外に驅逐する能はざる人間は、心の中の不善を、如何でか、根より絶つことを得ん、されば、往々にして、法律上の罪を、すら犯すことあるあり。さはれ、われ等は、嚴峻なる眼をもて、これ等容るべからざる罪人を、睥睨し、一喝の下に、人間の籬圈外に放逐せんと思へども、その道義的犯罪、たとへば、自殺の如きは、理性より來る必然的結果として、之を、内延的宿命と觀取し、いさゝか寛大ある判断を

九十三



下して、怨せんとするものあり。それは審美の要求のいとも切にして、その中に幾分の美ある分子をふくめるものある以上は、われ等は感情の地位をもて、冷靜ある品性の上に置かんとするものあるによりてあり。今も例を引きけんやうに、善美の衝突は、之を絶対に解釋せずして、やゝ寛大ある判断を下し、美のために、道義の若干を犠牲に供へんとするの傾向は、今の文學者間に數多く説かるゝ所、それに向ひて、攻撃の鋒をむくるもの極めて尠少あるを認む。

自殺の無道なることは、誰しも知る所にして、今更喋々せざるべし、されど若し自殺の總てをもて、道義の犯罪ありとすれば、わゝ、情死をも、その中に包容せざるを得ざる可し、然り、慥かに情死あるものは、天賦の生命を有意に縮少するものにして、理義の破壊者たるには相違なきなり、されど、われ等は、その相愛し、相慕ふ心がいとも深くありまさり此の世に

於いて夫と呼ばれ、婦と喚ばれて、楽しき月日を送らんとすれども、如何せん、冷酷なる世の垣は、二人を内と外とに分ちて、相見相語るを阻害するにより、その苦悶より擺脫して、心のまゝに黄泉に赴きて、三途河邊に一蓮托生の幸福を享けんとするものあり、されば、その意志、知識とやういはん、點より見れば、情死者は、まことに憐むべき愚物ありといふ可きも、若し、その狭き男女の頭腦中を剖きて、中に潜めりし感情を發き、あは、如何に、血と涙とが凝結したるかを見出し、得べく、且つ、その美妙なる天惠の愛情が、いたく、高潮ありしことを認識せん、わゝ、美はしきは情死ある哉、人が、最も、主要とあせる生命をも、献けて、戀人のために、尽くさんとする情死は、まこと、美はしきものゝ、極みなる哉。

されば、世の所謂『修身書』の内容は、極力この情死を排斥して、已ますといへども、かの『文學書』ともいはるゝものは、それと反對にこれを歡迎せる



ものゝ如し、われ等は近松門左衛門の淨瑠璃本を繕きて、その世話物の多くは、みち『心中』を描きたるを見、情死が、わが國の劇曲に、多大ある材料を興へ、而も、よく、多くの傑作を出さしめしことを謝せずんばならず。』  
 あゝ、情死よ、あはれある情死よ、安んせよ、世はさまで冷酷あるものには、あらし、たとひ、世の倫理學者は、冷靜なる眼もて睥睨し、一喝の下に不義の罪名を負はさんとするも、裏面には、満身の熱血を絞りて、讚美の歌を謠ふものあるべし。

名高き『曾根崎心中』を繕きて、情死前の男女の心のいかに擾れ騒ぎしかを見よ、さあがら、降りみ降らずみ、五月雨の空のごとく、迷雲むらくと行き交ひて、心の光りは曇りたるを知らむ。あゝ、あはれある、左の一説を見よ。

此の世の名残夜も名残り、死にゆく身を譬ふれば、仇が原の道の霜

一足つゝに消えてゆく夢のゆめこそあはれあれ、あれ數ふれば曉の七つの時が六つありて、残る一つが今生の、鐘の響きの聞納め、寂滅爲樂と響くなり、鐘ばかりかは草も木も空も残りとも見上くれば、雲心なき水の音、北斗は冴えて影映る、星の妹背の天の川、梅田の橋を鵲の橋と契りて何時迄も我と和女は夫婦星、必ず添ふと継り寄り、二人が中に降る涙、河の水、蒿も増るべし、向ふの二階は何屋とも、覺束情最中にて未だ寐ぬ火影聲たかく、今年の心中善惡の、言の葉種や繁るらむ、聞くに心も吳羽鳥、あやあや作日、今日までも、餘所に云ひしが明日よりは、われも噂の數に入り、世に謠はれん、謠は、謠へ、謠ふを聞けば、どうで女房にや持ちやさんすまい、いらぬものじやと思へども、實に思へども、歎けども、身も世も思ふまゝ、あらず、何時を今日とて、今日が日まで、心の舒ひし夜半もなく、思はぬ色に苦



九十八

しみに、如何した事の縁じややら、忘るる暇はあいわいあ、其に振捨  
て行かうとは、遣りやしませぬぞ手にかけて、殺して置いて行かん  
せあ、放ちはやらじと泣きければ、唄も多きに彼の唄を、時ころわれ  
今霽しも、謠ふは誰ぞや聞くは我、過きにし人も我々も、一つ思ひと  
縋り付き、聲も惜まらず泣き居たり、平常は左もあれ此の夜半は、せめ  
て暫は長からで、心も夏の夜のからひ、命追はゆる鶏の聲、明あばう  
しや天神の森で死あんと手を引いて、梅田堤の小夜鶉、明日はわが  
身を餌食ぞや、誠に今年は此方さまも、二十五歳の厄の年、妾も十九  
の厄年とて、思ひ合ふたる厄たゝり、縁の深さのしるしかや、神や佛  
にかけて置きし、現世の願ひを今此處で、未來へ回向し後の世も、猶し  
も一つ蓮ぞやと、爪繰る珠數の百八に、涙の玉の數そへて、尽せぬ哀  
れ尽くる道、心も空も影暗く、風しんくたる曾根崎の、森にぞ辿り

九十九

着きにける、彼處にか此處にかと、拂へば草にちる露の、我より先に  
まづ消えて、定めあき世は稻妻か、それかわらぬかあ、怖、今のは何  
といふものやらんヲ、あれこそは人魂よ、今宵死するは、我れのみ  
どこぞ思ひしに、先立つ人もありしよ、誰にもせよ、死出の山の伴  
ひぞや、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛の聲の中、おはれ悲しや、又ころ  
魂の世を去りしは、南無阿彌陀佛と唱ふれば、女は愚に涙ぐみ、今宵  
は人の死ぬる夜かや、淺ましさと涙ぐむ、男涙をはらくと流し、二  
つ連れとぶ人魂を、餘所の上と思ふかや、正しう御身と我魂よ、かに  
のう二人の魂とや、はやわれくは死したる身かヲ、常あらば結  
びとめ撃き止めんと歎かまじ、今は最後を急ぐ身の魂の在所を一  
所に栖まん、道を迷ふな違ふあと、抱き寄せ肌を寄せ、かつばと伏し  
て泣き居たる、二人の心ぞ不便なる。



あゝ誰か、これを読み、お初、徳兵衛のあはれなる心根を、悲しと思はざるものあらむ。あゝ如何ある心強き人か、「二つ連れとふ人魂を、餘所の上と思ふかや、正しう御身とわが魂よ、おに喃ふ二人の魂とやううう」といふを、愚夫愚婦の言葉とはあす、あはれ、血涙あるものは、更につぎの節を讀めよ。

涙の絲の結び松、櫻欄の一樹の相生を、連理の契に擬らへ、露の浮身の置どころ、サア此處にさはめんと、上着の帯を徳兵衛も、初も涙の染小袖、脱いでかけたる櫻欄の葉のその玉箒、今ぞげに、浮世の塵を掃ふらん、初は袖より剃刀出だし、若しも道にて追手のかゝり、割れくにあるとても、浮名は捨てじと心懸け、剃刀用意致せしが、望みの通り一所に死ぬる、此の嬉しさと云ひければ、ヲ、神妙頼母し、左はどに心落ちつくからは、最後まで案ずることはあし、さりながら

今はの時の苦患にて、死姿見苦しといはれんも口惜しし、此二本の連理の木に、身軀をきつと結びつけ、潔よう死ぬまいか、世に類あき死様の手本とならん、如何にもと淺ましや淺黄染、かくれとてやは抱え帯兩方に引張りて、剃刀とりてサラ〜と、帯は裂けても主様と、妾が間はよも裂けじと、控と坐を組み二重三重、動かぬやうに儘と締め、能う締まつたか、オ、締めましたと、女は夫の姿を見、女は夫の姿を見、男は女の軀を見て、這は情あき身の果てぞやと、わつと泣き入る許り也、ア、歎かじと、徳兵衛顔ふり上げて手を合はせ、われ幼少にて誠の父母に離れ、叔父とそひ親方の苦勞になりて人どかり思も送らず此のまゝに、亡き跡までも兎や角と、御難儀かけん勿躰あや、罪を許して下されかし、冥途に在ます父母には、追付お目にかゝるべし、迎へ給へと泣きければ、お初も同じく手を合はせ、此方



百二

さまは羨やましや、冥途の親御に逢はんとある、妾が父さま母さまは、健でこの世の人あれば、何時逢ふことのあるべきぞ、便は此春聞きたれども、逢ふたは去歳の初秋の初が心中とり沙汰の、明日は在所へ聞えなば、親達へも兄弟へも、これから此の世の暇乞ひ、せめて心が通じなば、夢にも見えて呉れよかし、懐かしの母様や、名残惜しの父様やと、しやくり上げ、聲も惜ます歎くにぞ、夫もわつと叫ひ入り、流涕憧るゝ心意氣、ことほりせめて哀れあれ、何時まで言うて詮もなし、はやく殺して〜と、最後を急げば心得たりと、脇指するりと抜きはなし、サア只今ぞ、南無阿彌陀佛といへども、有繋此の年月、愛とし可愛と締めて寐し、肌に刃が刺られふかと、眼も暗み手も顫ひ、弱る心を引直し、取直しても猶ふるひ、突くとはすれど切先は、彼方へ外れ、此方へ反れ、二三度ひらめく、刃の刃あつと許りに

喉笛に、ぐつと通るか、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛と繰り通し、繰り通す腕先も、弱るを見れば、両手を伸べ、斷未魔の四苦八苦、衰れといふも、餘りあり、我とても後れうか、息は一度に引き取らんと、剃刀取つて、咽喉につき立て、柄も折れよ、刃も砕けよと、えぐりくり〜目も眩らめき、苦しき息も、曉の血死期につれて、絶え果てたり、誰が告ぐるとは、曾根崎の森の下風音に聞こえ、取り傳へ、貴賤群集の廻向の種、未來成佛疑ひなき、戀の手本とありにけり。

筆致麗にして、讀むものゝ心の底に、一種の印象を遺さしむ、されど、われ等は、たゞ、茲に、巢林子の文章を批判するのみにては、思ふに、讀者をして満足せしむること、能はざるべし、あゝ、血涙ある讀者よ、われ、この劇曲の一齣を假りて、試みに、情死の中における美と善とを區別し、其輕重を語らんと、惟ふ、見よ、われ幼少にて、誠の父母に離れ、叔父とそひ親方の苦勞



百四  
 にありて人と爲り、恩も送らずこの儘に亡き跡までも兎や角と、御難儀  
 かけん勿躰ぢや、罪を許して下されかし、』といふもの、徳兵衛の胸中に於  
 ける、道徳的意志にして、『我とても後れうか、息は一度に引取らんと、剃刀  
 取つて咽喉に突き立て、柄も折れよ、及も碎けよと、えぐりくりく、目も  
 眩めき、苦しむ息も、曉の血死期につれて絶果てたり、』といふは、其行爲が  
 不道義なりとて、世の倫理家の齒するを恥づるところあるべし。されど  
 も、其の二つの人魂の飛び去るを見て、お初を戒め、『二つ連れど、人魂を  
 餘所の上と思ふかや、正しく御身どわが魂よ』と云ふ所、また、『あれ數ふれ  
 ば、曉の七ツの時が六つ鳴りて、残る一つが今生の鐘の響の聞き納め、寂  
 滅爲樂とひくくなり、鐘ばかりかは草も木も空も名残と見上ぐれば、雲  
 心なき水の音、北斗は冴えて影映る、星の妹背の天の川、梅田の橋を鵲の  
 橋と契りて何時までも、我どそもとは夫婦星』といふ所、あんど、相愛の情

百五  
 火胸の中に燃え上りて、たとへ、百斛の水を以てするも、これを消し得べ  
 き術なからまし、あゝ古への戯作者のよくも、いみじくも描きたりける  
 ことよ、われはいたく巢林子の功を偉かりとして、讚歎の誠意を表する  
 ものあり、あゝ世の絆にからまれて、相思相愛の戀情を圓うすること能  
 はざるものよ、願はくは死に赴け、死に赴け、この苦患の現在より脱がれ  
 て、寧ろ光明輝ける彌陀の浄土に往き、一蓮托生の幸福を享けんことを  
 いざさらば。



## 戀 愛 の 犠 牲

百六

婦人の髪もて大象も縛るべしとは言ひ古したる諺なれど實にいみじく恐しきは戀の力なる哉千の人道の法規を強ふるも万の論理もて抑ふるも得て枉げまじき強情我慢の者にてさへ一度戀の路に踏入りては百堤の水一時に決しけん如く滔々として流れ去り情義を斷ち法規を斥け只ぶるに戀の満足を求めんとして歇まず所謂煩惱の炎燃えて止まじ執着の心猿絶間かく狂ひては骨肉を捨て朋黨を棄て以て義理人道の沒義者となり郷黨社會の罪人とあるも郎が一笑を買ひ婦が満足をさへ得るに足りあは何の顧る處もなきありおはれこれ罪あるべきか狂あるべきかあらずあらず戀は人生最大の怡樂にして假令巨万の財寶を積むとも金殿紅圍に住居すとも得能ふまじき最大の怡樂は戀

を除きて他に得らるゝものあらんや。こちたき論理の繩を脱して裸躰のまゝに人情を觀なば人は戰鬥の巷に立ちて濁水を飲みて五十年の生涯を送らんよりは一滴甘露の美味を嘗めて一年の生涯を過さんどこぞ望むものかれ戀の巷に踏入りしもの亦斯くの如からずやは敢て戀愛と云はず名利と云はず濁ける人の希望を充たすべく世はあまりに冷やかあるものあれば只管に我が満足にのみ焦つ時は勢ひ此處に戰鬥の巷に立たざるべからざる運命に到らんなり然れども眇たる孤身いかに畢生の力もて焦てばとて壓抑無比の大敵を滅すべきやうもあらず終には運命の擒とありて悲惨の最期を遂げざるべからざる状態に陥るなり見よ彼の宇宙を達觀すてふ哲學者も濁れる世より人の子を救はんと云ふある倫理學者も詳しく彼等の心事を洞觀せば均しく名利に趨り虚譽を得んとする者あ

百七



るのみ、現んや政治をや、實業をや、嗚呼世は終に虚しき名譽の戦闘に過さざるを如何せん。

清きは戀の光りならずや、滔々たる濁世に身を捧げんとする健氣あるもの、只之れあるのみに非ずや、固より嚴かに論じおば、戀も所詮は自己の目的を遂げん爲と云ふ範圍は免るまじけれど、一度び濃やかなる戀愛成立てば、其自己の目的てふ觀念は全く忘却せられて、偏に對者の爲てふ、一点の光明を認むるより、外なきに到るあり。

われ等戀を思ひて此に到る毎に、戀の爲に身を捧げたる貞婦烈女の心事を憶ひて、潜然として涙を墮さざることなかりき、戀愛に身を獻したる古の貞婦の實に數へきれぬ程多かれど、袈裟御前の事蹟の如きは、洵に千古の下、博た同情の涙を禁めおえざらしむるものあり。

鴨川の水縦しや、涸れおん時ありとも、千古渝らざるものは貞婦袈裟の

譽れあり、あゝ連理の契り濃やかにして、鴛鴦夢圓かに過しつるに、暴慢夜叉のごとき盛遠に垣間見られしおん身こそ、實にや運命の擒ありけれ。暴者の繩は將さにねん身を縛らんとせり。されどいかに迫害せられたればとて、操を破り愛を蹂躪し、人知れぬ暗黒に良心を陥入れて、さる恐しき罪を犯さるべきや、慈母にや計らん、良人にや告げんと、おはれ乱麻の惱みに胸を痛めしが、もしさる事もしかば、母の命を斷たんと云ふある威壓は益々迫り來りぬ。袈裟は前門に虎を受けて、後門人情の罠に陥らんとせり。こゝに到りて袈裟は我身一つをかきものにして、此苦悶を免れんものと心を定めつ、寝くたれ髪を探りて、良人の首級を獲り給は、おん身の心に隨ふべしと盛遠を欺き了せて、枕燈消えて闇は黑白あき闇の中に、過越方の運命を泣き、母や夫に事あかれよと念じつゝ、おはれ半生の果敢あき運命を乗せたる花の如き顔ばせを、暴者の刃に與



へ去りぬ心も闇に迷ひたる盛遠は外に出て、始て袈裟の首あるを見  
 き、流石の暴者も此健氣ある最期を知りてはいかで悔悟の念の起らざ  
 らんや、實に諺に云ひけん如く、惡に強ければ善にも強き盛遠は此に醜  
 然として懺悔の光を認め、決然として一切の妄執を絶ち、血氣火の如き  
 身を冷やかある墨染衣に包みて、生涯袈裟の菩提を吊はんものと圓頂  
 緇衣の佛弟子とありぬ、實にいみじき力をもてるは戀からずや、劍を揮  
 へば百千の鐵騎も斷つべく、怒號一度すれば三軍の膽を冷さすべき強  
 者をして、駛りて桑門の人たらしめしもの、偏に戀の力にあらざるあか  
 らんや。

身を捨て、肉躰のどさしを破らざりし袈裟には比ふ可からぬぞ、郎の  
 爲めにさち多かる可き半生の命運を墨染の姿に捨てはてし千手の前  
 もまた衰れに優しからずや、千手は一日の情を重衡に得たるにはあら

ざるあり一夜の愛を受けたるにもあらざるあり、只若殿原と共に這薄  
 伴の公子を慰めたるのみ、只わうじよりの急を弾じたるを聲細々と和  
 したるのみ、嗚呼好因か惡縁か、一度其席を同うするや、靈犀一點の通す  
 るものあり、何物の動すともなきに、心の波は搖きそめぬ、仰いで牡丹の  
 花に比ひられたる中將の美貌を見、俯してさちあき其半生の命運を想  
 ひやれば限りなき同情の念はむらくと湧き出でぬ、うら苦き女の男  
 子に對する同情は、まこと戀に達す可き階段にはあらずや、あはれ夜は  
 闇し、四面楚歌の間に、數行虞氏の涙を注ぐものは、妾あらずや、又何人ある  
 可きよしや、露の干ぬ間を待ちあへぬ、郎が身に、つれそふこと能はずと  
 も、まだ見ぬ世界の美しかる可き花の蓮臺に、手を携へて夫婦の契固か  
 らば、妾の望は全きなり、悲しからずや、千手はかゝる思ひにあやしき戀  
 を得て、身を忘れはてぬ、涙を共に東西に別れし後も、叶はじとは思へど



も佛もみそきはせり神もぬませり心の清らある郎の身にさち薄からざれどひたぶる祈れども山の端出づる嫦娥の光りにいつ迄か星の一つ支へらるべきやがて南都に斬られて亡き數に入りぬと聞くや心も狂はん斗かりに泣き悲しみしが観ずれば泡沫夢幻の世に誰か爲に容作り誰が爲に笑ひ樂まん若かず黒染の姿に浮世を忘れんと文なす翠柳の黒髪断ちてはるくと信濃路にさすらひ遂に善光寺に杖をさめて日夕中將の菩提を吊ひぬ。

星月夜の鎌倉山に遊ぶ人はしばし鶴岡華表の前にイみて遠き建久の往古を偲べよかし。新業亡びてこゝに六百年世は幾轉遷の凋落を経て、鎌倉幕府の榮華を今に釋ねん由もあけれど仰いて八幡境内の藁を眺め低迷時を久うすれば素袍を穿ちたる鎌倉武士の警蹕の聲嚴かに社前の石燈を上下するさまを現に見かん分けても偲ばるゝは舞樂殿の

面影あるかあ怨恨亢する將軍の御前に曳出され吉野の奥深く入りにし君の佛を忍びて滿腔の涙を嘸みつゝ羅綾の袂を翻へしてしづや賤しづの芋環くりかへし乍ら狂へる蝶の一舞を舞ひおさめたりし白拍子静の心事やいかりけんあはれ身は賤しき白拍子なり夜毎に變る手枕に心にもあき涙を見せて一夜の春を賣らんとする賤しき間に生ひ立てるもの、權勢圍國に溢れたる巨頭將軍の猜忌心を春の氷と解かさしめにしものは洵に身を献したる戀の焔の熱には非ずやあゝ静は實に千古の貞婦なりけるよ戀の偉大ある勢力を示す千古の模範ありけるよ。

されど拙きわれ等の筆もて静の徳を傷けんに偲びされば下に戸川殘花氏が流麗暢達の筆もてものせる一篇を引きやがて此一巻を終るべし。



靜 御 前

戸 川 殘 花

戀 愛 と 文 學

若菜の上に友まつ雪のほのかに殘れる上に、うちゝりそふ空を詠め給へり」と云へる一段あり。此友まつ雪の文字はをかしき言はあらじ、今の世にもてはやす擬人法にもかあへり。かの末摘花にある「橘の木の埋れたる御隨身召して拂はせ給ふ、うらみがほに松の木のおのれ起きかへりて、さそこばるゝ雪も」といへる雪は怨みがほに起きあがりて松の白雪さら〜と仇なるふしあり。されど間垣の下にひとりさみしく友を離れし殘んの雪は、恰も是れ青塚一叢の秋草に喘えぐが如き孤燈の光、昭君が氈帳裏の涙に映するの觀あり。上天下地道里悠々として音書寂々たり、雪もし情あらば日影まつまの身をかこちて涙欄干たる時ある可し。

戀 愛 の 犠 牲

非情の殘雪情絲を織り就して有情の趣味を人間に與ふ、况んや美人の悲歡離合に於るをや、恨人の感測る可からず。

義經姫靜が吉野の奥にてあかね名殘りをすて判官殿に別るゝや、雪の下行く細谷川の水の音さびしかれよと一聲二た聲梢になく鳥の聲からくして藏王堂の廣前にぬかづき判官殿に今一度合せてたべと祈りしは亦た是れ友をはかれし谷間の白雪か。

「ありのすさみにくきだに、ありきのあどは戀しきに、  
 わかではかれし面影を、いつの世にかは忘るべき、  
 別れのこと悲しきは、親のわかれ子のわかれ、  
 すぐれてげに悲しきは、ふさいの別れありけり、

噫、夫妻の別若大衆も荒法師も理せめて袖を絞らぬはあかりしちらめ、靜女は何者ぞ、磯の禪師が娘にして都に名立たる白拍子あり、當時朝家



の御覺めたき源判官義經の妾あり堀川夜討の當日と云ひ大物の浦より其主判官と同船し終に吉野の奥まで従ひしを以て考ふれば、靜が義經に於る情交、義經が靜に對する鍾情の有様は世情の炎涼富貴の外にありしある可し。北の方と仰がれし平大納言時忠の姫君は、みしろし 璽の箱を乞得ん爲に意あらずも情を籠めし女あり。川越太郎重頼が女は本妻あれども義經が最愛の人にはあらずるが如し。多妻の弊風は今日の道德を以て論ず可からず。情交の濃疎を以て男女相愛の道を考ふるときは、何時何代として、尊貴ある戀愛の活潑々地に、人世に現はるゝを視ざるとか。し。義經と靜に於けるは戀愛の極致に對し千載の下恍として艶羨に堪へざらしむるものあり。試に思へ六條堀川の館に夜半端あく鯨波を發して、土佐坊が率ゐし兒玉黨の六十餘騎が押し寄せし時、醉倒せし義經を呼び覺ましゝは誰ぞ。緋絨の鎧ザツクと取りて義經に投げ懸け

しは誰ぞ、平大納言の姫君に非ず、川越重頼の女に非ず、今様をかしく唱ひ、時としては太鼓打たせて一番舞ひいでたる白拍子靜あり、鵜越の戦壇の浦の闘ひに身を鍛え、金賣吉次に従がひて奥の果まで流浪の身となり、陰險ある兄頼朝の機嫌氣襖を取り、熊熊に似たる坂東武者を兄頼朝の代官として指揮したる九郎義經なれば、豈に手もあく、足もあき、深閨の姫君等に、世波に倦みし心をば慰めんや、世路に悶えし情をば慰ましめんや。白拍子靜が水干姿は見る人の腸を斷ち、袖飄かへす舞の手ぶり、今様唱ふ聲音、拍子をかしく踏みどいろかす舞ひの足どり、公卿も殿上人も坂東武者もあれよくと手を搖かせば、手のみあがめ、足を動せば裳裙をのみあがめ、笑めは物怪の付きたる様にわななくと振ひ、唱へば心耳を澄まして恍惚としたく線糸をもて見る人の心も身も靜が織手に引かるゝに似たり、斯の靜が艶姿は明眸皓齒細骨輕軀の外形に



現はるゝ而已に非ず、其心意其情緒所天に對する謹嚴と情夫に對する密話の趣味を具へ、呂律調ひ琴瑟和し簾中の北の方も赧顔はなぢらむ行儀あり、又火邊にばうぞくあるもてなしにて、白うすき羅ろの單ひとへ襲かみ二藍ふたあざいの小こ袿きだつとのかいがしらに着て聲低く歌唱ふが如きうちどけし夫婦間の情味を露はすをりもあり。武藏坊辨慶も三井寺にて釣鐘ひきずりし手を袖口に縮めて盃を給たび佐藤忠信も碁盤をつかみて北條の軍兵を擲り殺しし怒顔の鬢かみの毛かみ艶えんに搔かき上げて會釋す。又土佐坊昌俊が夜討の初夜あ女の童を渠が陣所の近傍に遣りて其動靜を偵知ききしらしたるが如き、靜御前は才色兼備の白拍子あり、節操凜乎たる烈女なり、嬌艶たる美人なり、義經が鍾情も宜からず哉。詩伯テニンソンがイサベルを詠じたるは如何なる美人をや觀し、假令渠が理想の美人には適せずとも義經姫靜の事を地下の詩伯に語らまほしきと多し。曰く

“Eyes not down-dropt nor over bright, but fed  
With the clear-pointed flame of chastity,  
Clear, without heat, undying, tended by  
Pure vestal thoughts in the translucent fane  
Of her still spirit; locks not wide-dispread,  
Madonna-wise on either side, her head;  
Sweet lips whereon perpetually did reign  
The summer calm of golden chastity,  
Were Axel shadows of thy fixed mood,  
Revered Isabel, the crown and head,  
The stately flower of female fortune,  
Of perfect wifehood and pure lowlyhead”



百二十

カインはアベルと争ひ残酷の一撃の下に其の弟を殺しぬ、このアベルの血は流れてカザリアに至り、カインの嫉妬の念より上騰せし熱血の色も數千年の後迄人世の色相とあり畢んぬ。曹丕は曹植を除かんと欲し七歩の吟を以て骨肉が生死の運を試む。噫、同源分流混々たる汚濁の長江は鏗琤たる清泉を呑みて飽かず、七歩の吟に未だ満足せず、必ず之を罪に陥れんとして聲に應じて「兄弟」の詩を作らしむ。曹植が當日の光景は、白刃を頭上に垂下して、一縷の危きを吟聲の中に繫ぐに似たり。曹丕が背後には地獄の暗黒覆ひ來りて、彷彿の中に惡鬼火炎を噴き、サタン切出し、毒蛇青烟を吐き、劔山湯池が朦朧として現はるゝものゝ如し。兄の曹丕は、峨冠金帶錦袍の閻羅王か、嶽棘として死地に就く小羊は誰が子ぞ、父曹操の子にして丕には弟あり、煮豆燃豆箕、豆在釜中泣、本是同根生、相煎何太急。豆を以て豆を煮る其聲慘、惡趣甚茫々、冥々無日光、屍の

あるところに驚あつまりぬ。

鎌倉の巨頭公も亦た曹丕の類、其弟義經を觀ると蛇蝎の如く渠れ才を懷き智を抱く終に池中の物に非ず、若し早く除かずんば必ず後患を爲さんと、腰越より追ひ歸せり、土佐坊を以て害せんとせり、大軍を發して誅伐せんと爲せり、諸國に關を置きて恰も狩場の狐兎の如くに追へり、英雄とは木石の化して人と爲りしものか、豪傑とは夜叉の變して世に現はれしものか、相韓、卿趙、棍中、虱霸、楚王、吳樞、外猿、王侯、畢竟、一文、錢に値せず、賴朝は名利の潮流に舵を握りし、一舟子のみ、野老家風、至淳、只管村歌、社飲、夕顔、棚の下、涼は渠等終生知了せざる所あり。

静を八幡の社殿に舞はさしめし者は誰ぞ、源二位賴朝あり、舞はせられしは白拍子静と稱する磯禪師の女に非ずして、從五位尉源義經が妾あり、當時の社會より論ずれば妻妾の別も輕重を其間に爲す可きに非ず、



正しく静は頼朝の舍弟義經の妻あり其静をして稠人の前に舞はさしめ渠を看ること一舞妓に過ぎず頼朝非情の動物なる哉

残雪も友まつ空には望あきに非ず梅花離下の雪消え斷魂の情趣あり然れども櫻桃の紅白研を争ひ美を競ふに及びては天地の良縁茲に斷絶して上天下地の宿因終に滅し残雪は無情苛酷の天日の影に消失す可し静女が命運も亦陽春の残雪に似たり判官殿は白河の關のあかたに行きて音訪あし都に時めき給ひし頃の配下の將士も郎黨も悠々たる行路の人と去りて今は誰れ一人我を訪問ふ者もあし静が八幡の廣前に立ちし時は四圍皆あ渠に同情を表す人に非ず弓矢八幡も内陳深く坐し給ひ源家の骨肉が相争ふを知り給はざるか吉野の藏王權現もかの雪の日にぬかづきて祈禱りし聲には應じ給はざるか八ツの耳振り立てゝ聽し召すとは空言なるか秋雨にかやむ叢間の胡蝶嵐にもま

るゝ高嶺の花か坂東武士の錚々たる工藤祐經畠山重忠が鼓と銅拍子の音色につれて力弱くも舞ひ出でたり仰げば高く翠簾を垂れて坐するは誰ぞ他は右幕下とも云へ二位とも仰げ源氏の棟梁にもあれ正しく我には夫を困しむる當の敵あり妹背の中を押し離したる無情の人あり氏の神も見そかはせよ舞の手振りも今様も夫の仇の情を慰むる爲にとは學ばざりしよ習はざりしよ如何ある責苦にあふとも厭はじ如何ある苛責を蒙るとも避けじ殺さば殺せ打たば撻てやはか頼朝を祝す可きやと一ト聲高く唱ひ出でしは

まづやしづ倭布のをだまきくりかへし

昔を今にあすよしもがあ

昔を今にあすよしもがあ六條の春の風堀川の秋の雨大物の波吉野の深雪安きにも戀羽未だ嘗て孤からず蓮頭常に自ら並びしを鎌倉の燒



鎌もて夷心のまだ去らずや妹と背の中を裂き、斬り、断ち、口惜しと、柳眉も舞袖の風に逆立ち、桃顚も斷腸の涙に色褪め、雪に伏す、吳竹の力を籠めて起ちしが如し。社殿も廻廊も寂然として人聲なく、四邊物音斷えて神寂たる檐頭に天籟のをりく、銅鈴に觸るゝ音あるのみ、畠山も工藤も轉た凄慘の情に堪へず蕭然として其座を退出でぬ、籬中は如何、賴朝の怒を静むる政子が同情の温かき聲あるのみ、陪覽の諸士は聲をのみ頭を垂れて蕭然たるのみ、纏頭は綾か錦か威儀めしき士一人、静の傍に携へ來りぬ、嬌として力あき雨中の垂枝櫻、やうやく他に助けられて社殿を退けり。

静が一生の大事は鎌倉にあり、鎌倉の以前鎌倉の以後正史は憑るに足る可き事實を載せず、静は東に行きて途に死せしか西に歸りて家に死せしか、諸説紛々として確實なる傳記を編むと能はず、假令詳細なる事

實を識り得るとも静が精神を露し、は鎌倉の舞曲に在り、静が凜然たる節操も、脈々たる情緒も亦た鎌倉の舞曲に在り。

ダンテが理想は小女ピートライスに在り、渠はこの美人より美の極致を探れり、静が美は誰が汲みて鏘然たる泉を掬ふや、我は信ず、静が鎌倉の舞曲の一段を讀みし、男女の胸間には中將姫が藕糸の曼陀羅の如く、さゝ、蟹の蜘蛛の糸細くとも、白玉のごとくに、光輝を飛し、我が國粹の理想を織り出して、眞善美の三尊の光明とありし、あらめ、静は容色の美によりて義經に愛せられたり、一、静は機敏なる才によりて義經に愛せられたり、二、この一と二は都の静にて白拍子にも見るとを得可き點あり。静は冷熱によりて其情人を離れず爲に義經に愛せられたり、一、静は雪になやみ荒法師に責られ止むを得ずして良人の行術を敵に白狀せり、この所豪邁ある武夫の歡心を獲る故なり爲に義經に愛せられたり、二、



此一と二は吉野の靜にて白拍子の能く爲す可き點に非ず。靜は良人に別れ同情の友あく、鎌倉に送られ、現身の義經には愛せらざると雖ども、夜々孤灯の下に心靈上の相愛を樂しみたり。一靜もし情を斷ちて、秋波を他に微しく動かすところらば、錦衣玉食は言ふも更あり、母磯禪師を安穩に養ひ、或は鎌倉山の星月夜に燦爛たる光輝を争ふの榮もわりしある可し。靜は此を取らずして彼を採れり、彼とは何んぞや寡婦とかり、遺子を殺され、江湖に落魄するこの三悲劇なり。二この一と二は鎌倉の靜あり。

友まつ雪は鎌倉山の旭に消えぬ消えしは姿消えざるは神

戀愛と文學 終

明治三十四年三月二十二日印刷  
 明治三十四年三月二十五日發行

定價 金貳拾錢

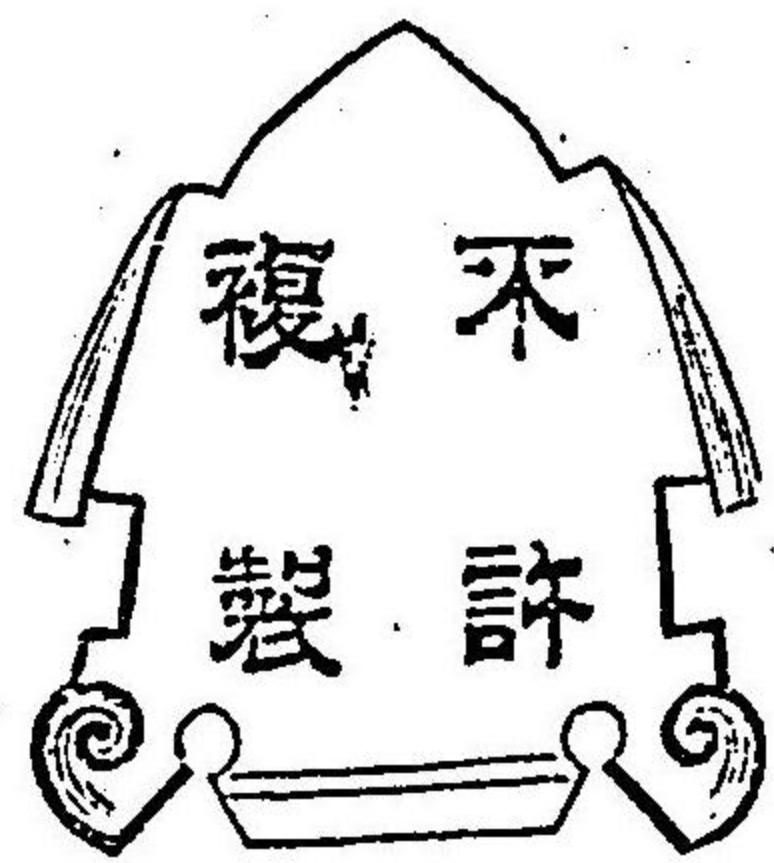
東京市神田區錦町二丁目六番地

發行兼編輯人 佐藤儀助

印刷人 宮本敦

東京市神田區雉子町三十四番地

印刷所 宮本印刷所



發行所

東京市神田區錦町二丁目六番地

新聲社



正岡 藝陽 君 著

# 新聞社の裏面

(最新刊)

定價 二十八錢  
郵税 二錢

「新聞社は文明の産み出したる新しき悪魔也」と絶叫したる著者は、いかに新聞社の裏面を観察したる乎。江湖試みに讀一過せよ。久しく閉されたる新聞社會の大秘密は、こゝに暴露せられて、社會の木鐸と稱する大鬼小鬼の、利に奔り色に喚く醜狀、目を掩はざるを得ざるべし、斷じて近來絶無の奇書。

## 目 次

- (一) 總論
- (二) 今日の新聞記者
- (三) 憐なる職業
- (四) 新聞記者の理想
- (五) 家庭に於ける新聞記者
- (六) 文學者と新聞記者
- (七) 新聞社の黒幕
- (八) 成功したる新聞記者と失敗したる新聞記者
- (九) 村山龍平と黒岩涙香
- (十) 井エロ
- (十一) ペイパー
- (十二) 新聞社の經濟
- (十三) 婦人記者
- (十四) 中央と地方
- (十五) ハイカラと壯士
- (十六) 新聞記者としてのビスマルク
- (十七) 編輯局の光景
- (十八) 編輯長と主筆
- (十九) 新聞製造術の發達
- (二十) 發送部の光景
- (二十一) 惡徳新聞
- (二十二) 通信社
- (二十三) 人物の半面……は新聞記者失敗談にして興味極めて饒也



正岡 藝陽 君 著

# 新聞社の裏面

(最新刊)

定價 二十八錢  
郵税 二錢

「新聞社は文明の産み出したる新しき悪魔也」と絶叫したる著者は、いかに新聞社の裏面を觀察したる乎。江湖試みに讀一過せよ。久しく閉ざれたる新聞社會の大秘密は、こゝに暴露せられて、社會の木鐸と稱する大鬼小鬼の、利に奔り色に喚く醜狀、目を掩はざるを得ざるべし、斷じて近來絶無の奇書。

## 目

- (一) 總論 (二) 今日の新開記者 (三) 辨かる職業 (四) 新聞記者の理想 (五) 家庭に於ける新聞記者 (六) 文學者と新聞記者 (七) 新聞社の黒幕 (八) 成功したる新聞記者と失敗したる新聞記者 (九) 村山龍平と黒岩涙香 (十) 井エロ
- ーペイパー (十一) 新聞社の經濟 (十二) 婦人記者 (十三) 中央と地方 (十四) ハイカラと壯士 (十五) 新聞記者としてのビスマルク (十六) 編輯局の光景 (十七) 編輯長と主筆 (十八) 新聞製造術の發達 (十九) 發送部の光景 (二十) 通信社 (二十一) 惡德新聞
- (附録) 人物の半面……は新聞記者失敗談にして興味極めて饒也

## 次

# 出版目錄



新 聲 社



青 年 文 壇 之 中 堅



新聲は文學美術兩界に大雜誌なり。掲ぐる所、韻文、雜錄等、「主張」欄は、社中同人の虹霓の氣を吐く所にして、文藝小觀、社會時言の二に分つ。「人物」の文士月旦と、文壇風聞記は、他に此を見る可からざる者、一は森嚴の筆當代の名家を評論し、一は文壇の奇譚珍話を網羅す。「餘材」の甘言苦語には、覆面の武者長刀を揮うて辻斬を試むるあり、言、文學美術社會演劇の各方面に亘りて百人百様の觀察、亦一代の奇觀也。其他の諸欄皆青年文士の熱血になり、一篇一章三篇に似せざるはなし。而、美術的趣味を鼓吹せんが爲め、して本年よりは大に、繪畫を毎月十數面を掲げ、且泰西の穂、其他新派畫名畫又は我古代の繪畫を寫眞銅版の製して出し、問々文、百頁、而して、舶來の光澤士の肖像を載す。一巻約百頁、滿紙、舶來の光澤紙を用ゐて印刷を鮮明にす、内容外、旭日の天に朝す文壇を横行満歩し、文學雜誌中發行部數多きと第一に至れば偶然に非る也。

定價

一部拾貳錢、六部六拾六錢、十二部壹圓廿錢、郵稅一部一錢〇、每月一回十五日發行〇



著 君 園 薰 子 金

# 月 れ わ 片

落合直文君序 大町桂月君序  
與謝野鐵幹君序 (訂正再版出來)

美 頗 釘 裝 \* 好 頁 質 紙

著者徒爾に歌はず、歌へば乃ち吟腔鳴り韵致亮劉として盡くべからざらむとす。著者が名、江湖に騒喧せられて、其歌一々定評あり、此に懸挽の言を呈するに忍びず。唯信ず、滿盤の松影、水に落ちて、一禽雨を呼ぶの夕、燈を別り梧に凭りて、静かに其詩句を味へば、益する所、管に神靈を清うするに止まらざるべし。一卷の「片われ月」所載和歌數百首あり、美文十數篇あり、情致釋約にして筆力雄麗以て近時詞壇の標幟とすべし。

錢 四 稅 郵 錢 五 廿 價 定

中 村 不 折 君 畫 結 城 素 明 君 畫  
一 條 成 美 君 畫 (寫真銅版印刷)

「墳墓」は絶好の詩題に非ずや  
單調なる文壇、正に此奇書なかる可からず



新 案 製 版  
定 價 廿 錢  
郵 稅 四 錢

本書は、人生の平和靜安なる安息所とも云ふ可き墳墓に就いて、種々の方面より觀察を下したり。章を墳墓とは何ぞや、墳墓と薄暮、陵墓の沿革、死と墳墓、墳墓と偉人、無縁塔、墳墓と詩人と、墳墓と歴史、暮畔の感慨、比翼塚、月と墳墓、靈供塔婆の十二に分ち、精細奇警の觀察、流暢典雅の筆致讀者をして感極つて涙滂沱たらしむる者あり。殊に比翼塚と無縁塔とは雙つ乍ら美文の極粹金聲にして玉振なるもの、墳墓と薄暮及び月と墳墓の二章は、何故にそのよく調和する乎の疑問につき一々古歌古詩を例證として立論し、議論精緻一讀の下首肯するに吝ならざる可く、其他の諸篇、皆苦心慘憺の餘に成るもの、もと危然たる大冊子にあらざるも、儘に世の流行を趁うて出版する雜書と異なり、趣味饒多なると殆んどろの比類を見ざる可し。



新聲社編輯局編

# 創作苦心談

定價貳拾錢  
郵税金四錢

凡ろ一藝一業に秀づるもの、必ずや常人の夢想せざる苦心あり、解牛の徒、承蜩の輩と雖も、其道に達せるものは、其言以て師となすに足る。况んや名を騷壇に立て、一篇一章常に讀書界を動す人の、苦心に至りては、後進のまことに稽に書して三省す可きものにあらざるや。本書は露伴、柳浪、水蔭、宙外、魯庵、鏡花、風葉の諸子を始め、當代知名の文士に就いて親しく其苦心談を聞き、以て一書を成せるもの也。文章についての苦心談あり、材料の蒐集についての苦心談あり、或は批評家に對する氣焰あり、文壇に對する抱負あり、作物中の人物に關する談話は興味最も深く、作者の經歷談亦深く味ふべし。小説美文の筆を執る人は勿論、志を明治文壇に寄する人は必ず一本を座右に置く可く、明治文學史を編する人に在りても、少なからぬ裨益あるべし。

無名氏著 ● 山中古洞君表紙畫



第一 總論	第七 雨……
第二 海……	第八 雪……
第三 山……	第九 霧と雲……
第四 草木……	第十 露……
第五 天象	第十一 雜種……
第六 風……	第十二 鳥獸……
	第十三 色相論……

全一冊 定價郵稅共  
金貳拾錢

巖岫たる山、澎湃たる水、天は渺邈として無數の星辰を懸け、地は寥曠として百二の山河を載す、春秋代謝して花月の観、未だ盡さず、風雨調和して禽蟲の聲、遂に老いず、是れ實に自然の一大美觀に非ずや、若夫れ萬斛の吟思凝つて筆を忘我の巖岫に購らむとするの時に至ては、我は六根汚濁の人の子にあらずして、既に自然の窟見たらんとする也、若者は筆の奇矯と識の博該を以て名を當代の文壇に馳する者、自然に吟嘯する茲に幾年、詩の眼光に映じて種々の觀察を恣にし、此を『自然美觀』と題して梓に上す、均しく自然の窟窟見たらむ者は、請ふ讀過十回して其の價值と興味とを玩把咀嚼せよ。



新聲社  
同人著

# 三十棒

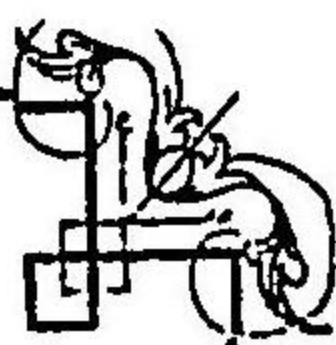
再版發賣

(宣言) 危機頭上に落ち来る、常套の警語を以て排し得可きにあらず。我黨口を開けば熱罵、筆を執れば烈言、好んで敵を天下に求むるもの、豈奇を街ふが爲ならんや。吟花嘯月江湖別に其人あり、我黨一管の筆、只社會革新の爲に揮うて天職を全うせんのみ。

『萬朝報』評(よるづ女學記者) 新聲社同人中に頭角を抽んずる橋香と梅溪の著也。論ずる所は、文藝問題の多岐に亘り、文章は概して簡切れよく、且つ氣韻あり、開巻殊に面白く讀まる、諷評、官評、或はさんらんかんの脱をなすもの多き當節、熱罵苦言、敢へて厭はざる二子の意氣や太だ欣ぶべし。而して更に欣ぶべきは、其熱罵苦言の聰明なる判断に出づることなり、『三十棒』の題名、正に其實質に適ふ。

『大阪毎日新聞』評 此は新聲社中の人々の手になれるもの抱負、主張、論議等を蒐集し一冊子となせるもの、勇往の文、縦横の筆、氣韻天に揚るの意氣あり、この抱負あり、以て文壇に馳騁するに足る、また一讀すべきの好冊子たらん。

○紙數百七十五頁……定價貳拾錢、郵稅四錢○



## 明治文壇の精華

を集めて此一卷を成す ○紙數大列定價郵稅共拾九錢



# 秋風琴

### 訂正參版

小説評論

夜涼車	零落	春江	監督	水詩評	詩人の心	非功界	宗教界	總論
内田魯庵	徳富風花	小栗風花	泉鏡花	久保天隨	後藤宙外	緒方流水	佐藤香	中村春雨

美文韻文

わが初恋	村白壁	野師調	法なる嘆	天なる嘆	文壇風聞記	文界一夕談	文士雅號譚	文界と梨園	紫雲紅霞
------	-----	-----	------	------	-------	-------	-------	-------	------

興野鏡幹	田山花袋	澤川泣雲	小島烏水	蒲原有明	妖堂居士	某文士	支々	梨園	峰園
------	------	------	------	------	------	-----	----	----	----

しな比廉至の價定富豊最料材

### 寫眞

大町桂月 ○崎崎藤村 ○徳富風花  
小宮武榮 ○泉鏡花 ○内田魯庵  
田山花袋 ○大野洒竹の諸君

### 筆蹟

(寫眞版) 尾崎紅葉君、正岡子規君(俳句)  
故一葉女史(傑作十三夜之原稿)



新聲記者編

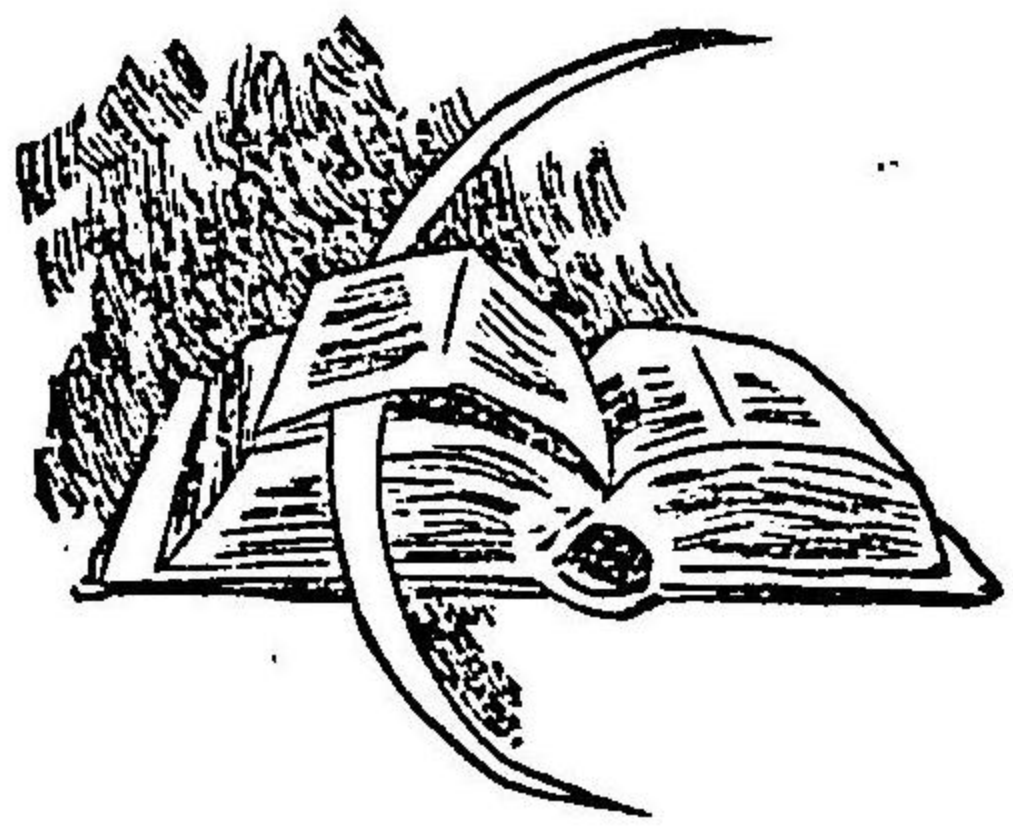
# 弦月

青年文集

全一冊洋製

定價二拾錢

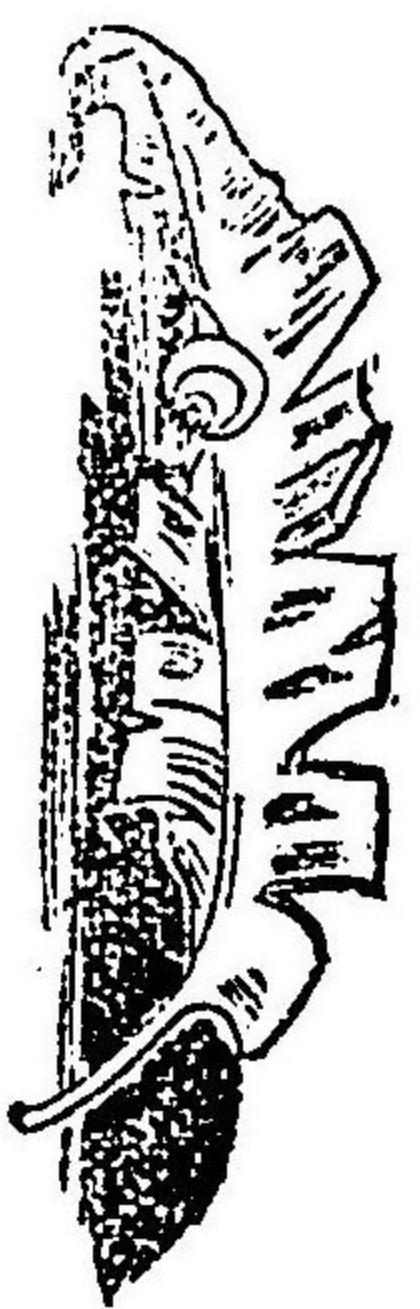
郵税金四錢



青年文士の作を集めて『弦月』を編す。眺むるまじろの文、無量數十篇、江湖俊逸の筆に成れるもの、美文あり小説あり、隨筆あり、一篇ごまに趣味饒多にして詩境自ら新脆、之れを譬ふれば、秋葉水を照して奇香雨に濕ふが如く、落梅標を撲つて冷艶風に覆せたるが如し、『弦月』は近時文壇の珍寶を以て自ら許すもの也。

# 月蓮風蓮

國府犀東君著



國府犀東君 豪宕矯健の筆と、縦横四面の才を負ひ、夙に一代の奇俠兒を以て稱せらる。本書は君が雜著を集めたるもの、世を嘲るの涙あり、自然を歌ふの聲あり、一字一涙、一句一血、興趣楮端に逸飛し、韻聲縹緲として終に盡くへからざらんとす、一卷悉く是れ三嘆九詠の出色文字。

(定價二十五錢、郵税金四錢)

# 白露集

中村不折 啓書  
下村爲山 君畫



文學士  
文學士  
文學士

久保天隨君  
淺野馮君  
戸澤姑射君  
合著

(三版)

ろも觸れなば碎けん白玉のうち、清き涙をつゝみて、天地の萬象をうつすものは露にあらずや。白露を以て名とせる此集は、やがて戀や、無常や、運命や、人の世のわはれの數々を、おらはして剩すなし。人生の運命を知らんとする者は此集を見よ、自然の奧秘を叩かんとする者は此集を繙め。若しこれ其文に至りては、誠に當代の絶品、艶麗豪宕悲慨、皆其妙を極めて、一語一句鏗然耳に徹し、渙然目を奪ふ。美文に志を寄する者の机上、殊に此集なかる可からず。寫眞銅版に刷して巻中に挿める不折爲山二子の畫は臚心鏤肝の餘に成りて、錦上花を添ふるもの。今回訂正第三版發行す。

美文壇之絶品

總クローズ金文字入〇定價參拾錢郵税金四錢











正編五版

# 俳句評釋

續編三版

著 河東碧梧桐君

批評

新派の曉河東碧梧桐氏が撰集を誰にも解し得る様に丁寧に評釋を加へたるもの何れもその精神を捉へ得て、駄宗匠流空索の末に走りざるはよし、且つまた以て新派の立脚地を窺ふを得べく、初心者も座右の珍さすべし。(大阪毎日)

正編

俳句は詩形の短小なるが故に、簡警濃麗を主として餘韻を含蓄せしめ、且つ故事歴史等を援引し來るか故に、古今の名句多くは解し易からず、是れ初學の士の最も愛ふる所、本書は古今の名句を選び、丁寧懇切なる註解を加へ、其苦心經營の存する所を知らしめ、傍ら著者か自家の工夫を述べて、作句上の秘訣を教へたるもの也。

續編

『俳句評釋』の一卷を公にするや、初學の士趨走して皆是を求む、著者江湖嚙望の厚きに激し、勵精更に筆を續志に執り、正編に洩れたる秋春の二季を評釋し、以て完璧缺くるなきものとなす。其評論の嚴正にして痛快なる、實に快刀一閃、亂麻を斷つ趣あり。試に讀一過せば、俳句を鑑識する上に於て、作法の妙機を知る上に於て、少からざる益を得べし。

全貳册

袖珍美本  
色彩表紙

定價參拾五錢郵稅四錢

美文韻文集

# わか草

定價郵稅共貳拾錢

美の神は偏頗なし、等しく美に讚仰する者を受す。笑ふ可き哉、彼偏狹の徒、僅に成せる名を恃みて、何派と號し何黨と稱へ、故らに關門を築きて、後進の進路を妨ぐ。關門毀たざる可からず、閑破らざる可からず。二十世紀の女壇は、最も自由に、最も清新なるを要する也。青年文士の傑作を集めたる一冊の『わか草』は、竊に閑破打破の急先鋒を以て自任す。

新聲社編纂(參版)

# 紅葉舟

定價拾五錢  
郵稅二錢

瀧まくら 雲く 記ら  
穿懷翠 虹萬 舊記  
荒磯物 萬語丈 舊記  
冬お磯 萬語丈 舊記  
ねぼるも 影り語丈 舊記  
京のぼるも 葉影り語丈 舊記

大町桂月 戸澤姑射 島崎藤村 久保天隨 江見水蔭 小杉天蔭 淺野馮虛 河東碧梧

木書は當代一流の名家の作と、青年文壇に噴々の名あける人々の作とを掲げたる『百篇』の一として諷刺に値せざるはなし。

# 冠桂月

附錄 豆州の名勝 久保天隨 薄田泣菫 蒲原有明

全一册大判  
洋裝美本  
定價稅郵共  
金拾錢

本書は賞を懸けて江湖に募集せる小説美文韻文評論等を收めたる者

應募約一萬篇中より最も見る可き者を選ばれ、ば文想共に採拔を極む



評釋叢書

全部 六冊  
六冊映入定價郵  
稅共一圓四十錢

著者は肯斯道の名家、流麗暢達の筆を揮うて難解の好句を解し、詞章の巧拙を識し、其思想を論じ、作者の精神を發揮す。世上の翻譯、講義類と同日に談すべからず。

文學士 久保 天 隨 君 著 (第四版)

漢詩評釋

壹編

定價廿錢  
郵稅四錢

文學士 久保 天 隨 君 著 (第二版)

漢文評釋

貳編

定價廿錢  
郵稅四錢

評釋叢書

文學士 阪本 四方 太 君 著 (第二版)

俳文評釋

參編

定價廿錢  
郵稅四錢

文學士 内海 弘 藏 君 著 (第二版)

國文評釋

四編

定價廿錢  
郵稅四錢

文學士 淺野 馮 虛 君 著 (第二版)

英文評釋

五編

定價廿錢  
郵稅四錢

文學士 久保 天 隨 君 著

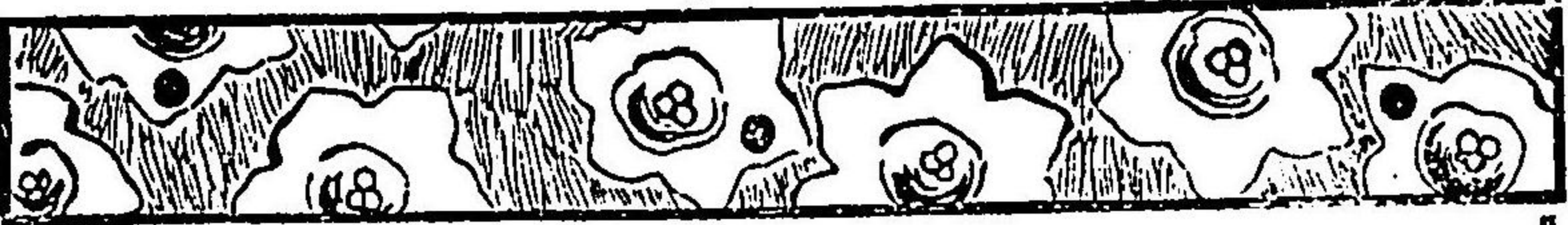
古詩評釋

六編

定價廿錢  
郵稅四錢

評釋叢書





# 青年文學叢書

編一 文學攻究法

編二 美文作法

編三 美學大要

編四 論文作法

編五 韻文作法

編六 青年と文學

米文學士 江藤桂華君著

全部六冊完成

青年文學叢書の著者は

文學を専攻して、三文學に精通す

青年文學叢書の文章は

流麗にして暢達、趣味極めて饒也

青年文學叢書の所説は

平易にして明快一讀直に解すべし

青年文學叢書の目的は

能文健筆の士たらしむるにある也

青年文學叢書の体裁は

美ならざるも質に過ぎず中を保つ

青年文學叢書の定價は

極めて廉、今の出版界に比を見ず

全部六冊 五拾貳錢

一部拾錢◎郵税各二錢



田岡嶺雲君著

## 嶺雲搖曳

全二冊 定價四十錢 郵税六錢

九版品切、目下十版印刷着手中也。

新聲記者編

## 若葉集

定價拾五錢 郵税二錢

青年文士の作數十篇を集む、叙記、叙情、評論の諸篇、皆特殊の面目を持して、他の模倣す可からざるものあり、明窓淨机の友とすべき也。

文注

書籍注文の際は書名冊子 號數等を明記して所定の 定價郵税を添へらるべし

會照

を要する時は三錢切手を 封入するか又は往復端書 を以て其旨申込まるべし

左記の書籍は品切にて、一部を止めず、遺憾乍ら御注文を謝絶す

扇頭小景 花ふゞき

春風秋聲 新鉢詩集

青年文叢 二葉集

翠嶺白雲 雅正軒詩話

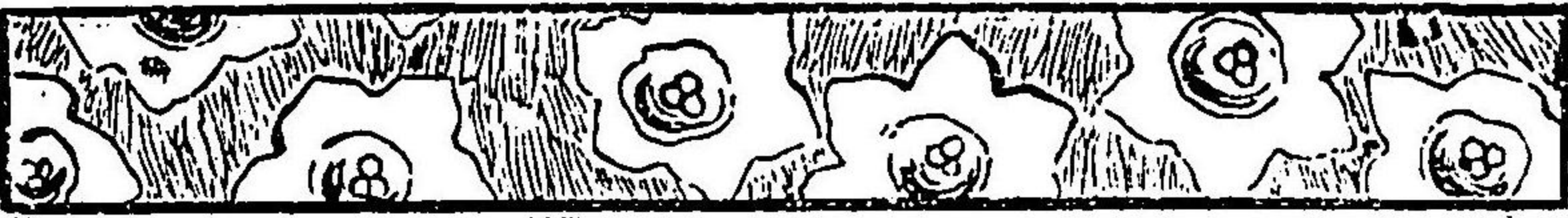
狀書

書狀の文字は最も明瞭に 書せらる可し文字の不明 なるは相互に失ふ所多し

券郵

切手代用にて拂込まるゝ 時は二錢又は一錢切手に て必ず一割を増さる可し





# 文章通信教授

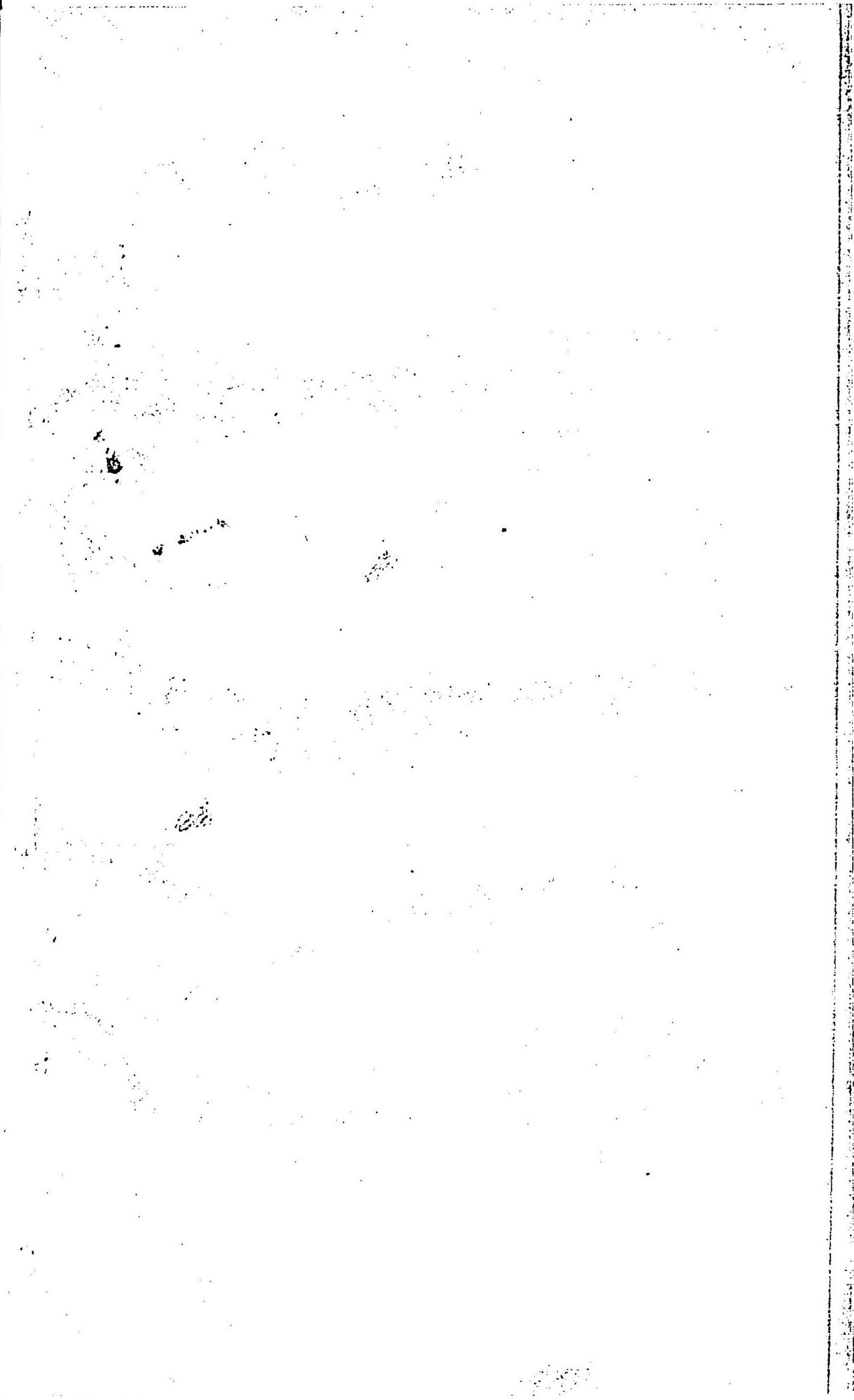
我國に於ける作文教授法の不完全なるは、中等の教育を受けたる者の作、なほ破格不法讀むに堪へざるもの多きを以て知るべし。是れ學界の大缺點たるのみならず、延いて邦家の文運を阻害すること實に少からざる也。本會は此必要によりて起りたるもの已に二ヶ年の歴史を有して基礎益々固く、生徒天下に滿ちて志望の一端に達するを得たり。講師及び學科は左に掲ぐる所の如くにして、苟くも作文の資料となり、研究の参考となるべきものは、悉く網羅して些の遺憾なきを期し、文章の添削は丁寧懇切以て生徒をして斯道の蘊奥に通せしむ。

○ 東京市神田區錦町二丁目六番地 大日本文章學會 ○

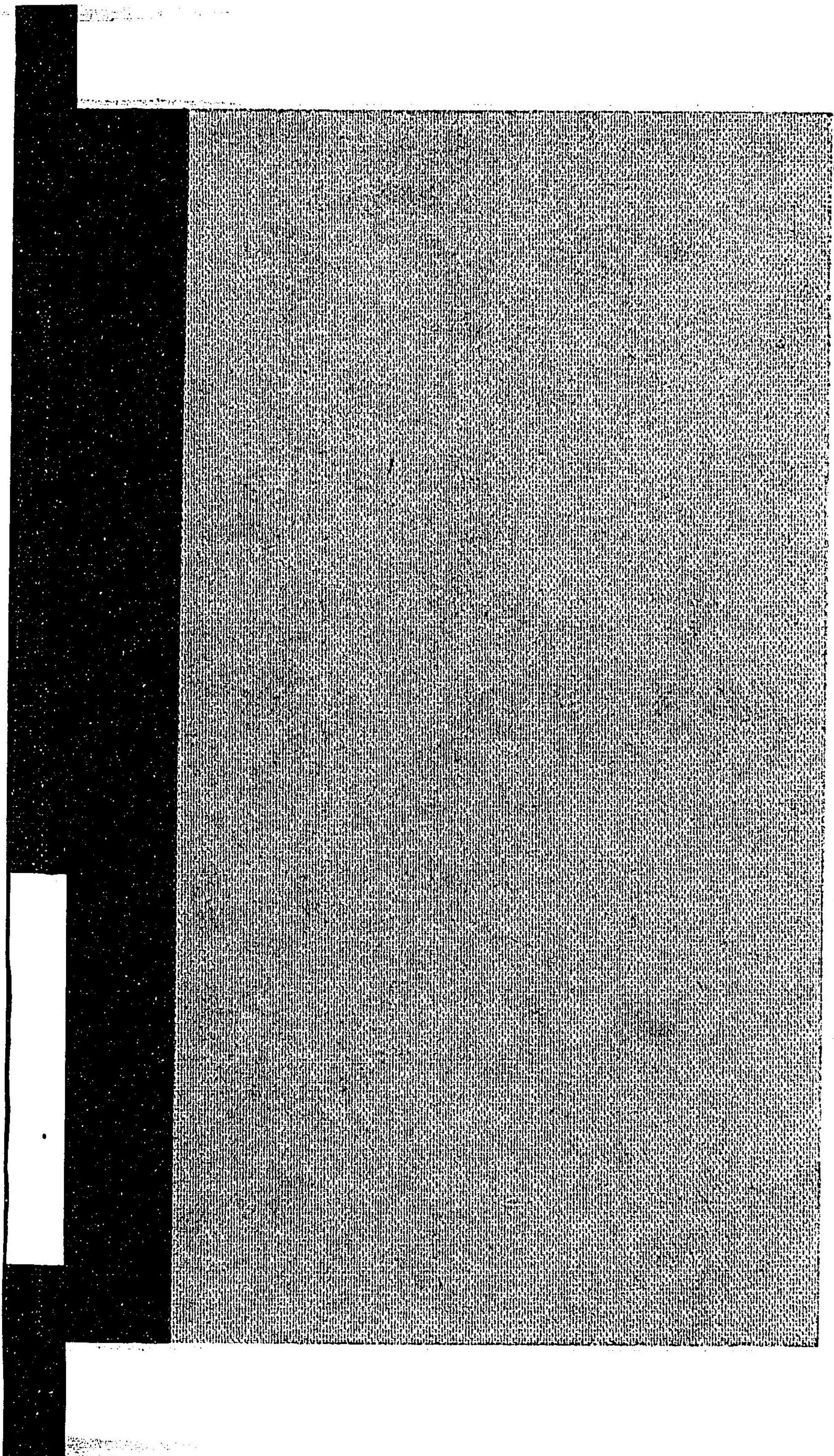
文章作法	文學士久保天	新 聞 學	除 齋 生 口 述
修 辭 學	文學士内海月	日 本 文 人 傳	江 藤 桂 華
日 本 文 典	文學士杉 敏	日 本 文 評 釋	江 藤 桂 華
審 美 學	文學士十時 彌	日 本 文 章 史	松 本 道 別
國 文 評 釋	文學士大町 桂	故 事 釋 義	大 松 道 別
漢 文 評 釋	文學士久保 天	熟 語 分 箋	大 松 道 別
國 文 評 釋	文學士内海 月	文 章 漫 話	大 松 道 別
漢 文 評 釋	文學士内海 月	明 治 名 家 文 粹	大 松 道 別
言 文 一 致 辨	文學士小柳 村	新 選 美 辭 類 纂	大 松 道 別

規 則 書 ば 往 復 端 書 に 申 込 め ち 申 込 め ち











特22

236

恋愛と文学

国立国会図書館

084850-000-5

特22-236

恋愛と文学

佐藤 儀助/編

M34

DBA-0198

